

2021年度
神戸大学国際教養教育院「歴史と文化」教育部会
外部評価報告書

令和4（2022）年3月22日

第 I 部 自己点検・評価報告書

はじめに

歴史と文化教育部会は、人文学研究科の日本史学、東洋史学、西洋史学、美術史学に所属する12名の教員、国際文化学研究科のアジア・太平洋文化論、日本学、ヨーロッパ・アメリカ文化論のうち歴史を専門とする5名の教員、同じく国際文化学研究科の比較文明・比較文化論で科学史を専門とする1名の教員、人間発達環境学研究科の人間発達専攻表現系講座に所属し、近代建築史、西洋音楽史・音楽美学、音楽民族学、ファッション文化論・表象文化論を担当する4名の教員が授業を担当している。これに日本史、考古学の非常勤を加えて、毎年、日本史 AB・東洋史 AB・アジア史 AB・西洋史 AB、考古学 AB、芸術史 AB、美術史 AB・科学史 AB の計16の講義科目を提供している。

本部会は平成17(2005)年度に全学共通教育部の下に結成されて以来、歴史学の基礎の上に芸術・科学の学術分野を加えたバラエティ豊かな教養教育を行ってきた。歴史学は高校の「日本史」や「世界史」の知識を前提とすることが多く、学生にとっては馴染み深い科目であるが、反面、大学の歴史学が高校までの歴史教育と、どのように重なり、どのように違うのかを説明し、学生側がそれまで習得してきた歴史知識の深淺と濃淡に対応した授業計画を立案するという、他の科目には少ない独特の難点を有する。一方、芸術史や科学史の教員は、自分の専門の中から「歴史と文化」という主題に相応しい授業内容を提供することが求められている。

平成27(2015)年4月、全学共通教育部は国際教養教育院に改組された。平成28(2016)年1月6日、改組後初めての外部評価委員会を開催し、3名の外部評価委員より、本部会の教育における改善すべき諸課題につき有益な助言を賜った。以後、現在に至るまでの6年間、それらの助言を念頭に置きながら、教学面での改善の努力を続けた。

令和2(2020)年度以後、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、「歴史と文化」教育部会が開講する授業は遠隔形式を採ることを余儀なくされた。その間、教員、学生共に新しい授業形態への対応に追われる一方で、従来の対面型授業では得られなかった学習効果も指摘され、より質の高い授業を実現する上での新しい可能性が開かれつつある。

「歴史と文化」受講学生のより良き未来選択に資すべく、本自己点検・評価報告書につき、関係者の皆さまの忌憚なきご意見とご提言をお願いしたい。

歴史と文化教育部会

部会長	緒形 康
幹事	貞好 康志
幹事	平芳 裕子

目次

第1章	教育の目的	4
	1.1 神戸大学の教育目標	4
	1.2 神戸大学の全学共通教育	4
	1.2.1 国際教養教育院	5
	1.2.2 全学共通教育の学習目標	6
第2章	組織・運営体制	9
	2.1 歴史と文化教育部会の沿革	9
	2.2 歴史と文化教育部会の構成	9
	2.3 歴史と文化教育部会の運営	11
	2.3.1 現在の運営体制	12
	2.3.2 歴代の部会長	12
	2.3.3 担当授業コマ数（週あたり）	13
	2.3.4 支援体制	14
第3章	授業の実態	16
	3.1 科目一覧と概要	16
	3.2 履修状況	17
	3.3 成績評価	18
	3.4 シラバス	21
第4章	授業振り返りアンケートにみる学生の意見	30
	4.1 アンケートの内容と注目点（コロナ前とコロナ後の比較）	30
	4.2 アンケートの結果の分析と2つの時期の比較	31
	4.3 自由記述の抜粋	34
第5章	「外部評価の評価項目モデル」に沿った自己点検・評価	40
	5.1 授業科目の共通目標	40
	5.2 組織構成と運営体制	40
	5.3 教育課程の学習成果	40
	5.4 施設・設備・学習支援	41
	5.5 内部質保証	42
第6章	1巡目の外部評価結果を受けた自己点検・評価	43
	6.1 1巡目の外部評価結果及びそこで明らかとなった本部会の課題	43
	6.2 課題に対する本部会の取組・改善への自己点検・評価	44

第1章 教育の目的

1.1 神戸大学の教育目標

神戸大学は、「開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を発揮し人類社会に貢献するため、普遍的価値を有する「知」を創造するとともに、「人間性豊かな指導的人材」を育成することを大学の使命とし、国際的に卓越した教育を提供することを基本理念とする「神戸大学教育憲章」に示す4つの教育目標に基づいて学部・大学院教育を行なっている。

教育憲章(平成14〔2012〕年5月16日制定)

神戸大学は、国が設置した高等教育機関として、その固有の使命と社会的・歴史的・地域的役割を認識し、国民から負託された責務を遂行するために、ここに神戸大学教育憲章を定める。

(教育理念)

1 神戸大学は、学問の発展、人類の幸福、地球環境の保全及び世界の平和に貢献するために、学部及び大学院で国際的に卓越した教育を提供することを基本理念とする。

(教育原理)

2 神戸大学は、学生が個人的及び社会的目標の実現に向けて、その潜在能力を最大限に発揮できるように、学生の自主性及び自律性を尊重し、個性と多様性を重視した教育を行うことを基本原理とする。

(教育目的)

3 神戸大学は、教育理念と教育原理に基づき、国際都市のもつ開放的な地域の特性を活かしながら、次のような教育を行う。

(1) 人間性の教育: : 高い倫理性を有し、知性、理性及び感性の調和した教養豊かな人間の育成

(2) 創造性の教育: : 伝統的な思考や方法を批判的に継承しつつ、自ら課題を設定し、創造的に解決できる能力を身につけた人間の育成

(3) 国際性の教育: : 多様な価値観を尊重し、異文化に対する深い理解力を有し、コミュニケーション能力に優れた人間の育成

(4) 専門性の教育: : それぞれの職業や学問分野において指導的役割を担うことのできる、深い学識と高度な専門技能を備えた人間の育成

(教育体制)

4 神戸大学は、教育理念と教育原理に基づき、その教育目的を達成するために、全学的な責任体制の下で学部及び大学院の教育を行う。

(教育評価)

5 神戸大学は、教育理念と教育原理が実現され、教育目的が達成されているかどうかを不断に点検・評価し、その改善に努める。

(全学共通授業科目実施の手引き：平成 27 年 4 月、神戸大学教育推進機構国際教養教育院、より抜粋。また神戸大学の使命、憲章、ビジョンはホームページにも掲げられている。)

1.2 神戸大学の全学共通教育

1.2.1 国際教養教育院

神戸大学教育憲章に基づき、大学教育推進機構が神戸大学の大学教育を担っている。大学教育の中でも各学部単位では実施することが困難な全学に共通する授業科目、すなわち全学共通教育を担うのは、その中の国際教養教育院である。国際教養教育院は、神戸大学の各学部とは別の独立した部局で、すべての学部のための共通教育の実施を担当している。国際教養教育院が行う教育の目的は以下の通りである。

教養教育の目的

神戸大学は、「学理と実際の調和」という開学以来の教育方針の下、教育憲章に示された「人間性」「創造性」「国際性」「専門性」を高める教育を実施するとともに、各学部がグローバル化に対応した様々な教育プログラムを開発してきた。このようなプログラムに参加する学生だけではなく、全ての学生を、自ら地球的課題を発見しその解決にリーダーシップを発揮できる人材へと育成することが学士課程の課題である。

そこで、全学部学生を対象とする教養教育において、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力を「神戸スタンダード」として明示し、その修得を教育目標とする。

神戸スタンダード

➤複眼的に思考する能力

専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける

➤多様性と地球的課題を理解する能力

多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける

➤協働して実践する能力

専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける。

1.2.2 全学共通授業科目の学習目標

総合教養科目は、多文化に対する理解を深め、多分野にまたがる課題を考え、対話型の講義を取り入れるなどの工夫により、複眼的なものの見方、課題発見力を養成することを目的とし、以下の区分毎に学修目標を定める。

(1) 多文化理解

グローバル化の進展に伴い、現代では異文化間の交流が一層深化し、同時に、異文化に対する理解不足が深刻な不和を招来しかねない状況が現出している。

この科目群では、こうした現代世界の状況を的確に把握するとともに、多文化共生のあり方を模索するのに必要な知識を獲得し、思考力を養成することを目標とする。

より具体的には、多様な時代と地域の、歴史、社会構造、伝統、宗教、芸術を扱い、これらを通じて異文化に関する知識を獲得するとともに、比較文化的観点から分析することにより、異文化との共生につながる多元的な思考力を養う。

(2) 自然界の成り立ち

私達を取り巻く自然界には様々な現象が存在し、日々変化している。これら自然界の様々な事象を、私達は体験を通して、関わりを持ちつつ理解している。しかし、多くが未解明であり、今後の研究の進展に負う面も大きい。従って、自然界の様々な事象を理解し解明していくためには、私達が自然愛を持って能動的に対応し、自然界を良く理解することが重要である。

この科目群では、私達の身近な現象として触れることの多い事象、例えば、科学技術と倫理の問題、現代物理学が描く世界像や身近な物理法則、自然界に見られるカタチにまつわる諸問題、ものづくりと科学技術における工学的な技術や将来展望、生命科学として身体の構造と機能の関係、生物資源と農業の今日までの関わりとその特徴、さらには昆虫や微生物との相関、などを取り上げ、私達の日常の問題として理解し、生活の中に取り込んで修得することを目標とする。

(3) グローバルイシュー

社会のグローバル化にともない、わたしたちは、国や地域の境界を越えて地球規模での解決が必要なさまざまな課題に直面している。この科目群では、これらの課題について理解を深め、その解決に指導的役割を果たす人材となるための基礎能力を身につけることを目標とする。

環境問題は、いうまでもなく地球規模の問題であり、自然科学と人文・社会科学の双方から幅広く接近する必要がある。また、人権、ジェンダー、政治や法制度、経済、ビジネスなど、わたしたちの生活に直結する問題領域も、いまや一国だけでは対処することが困難であり、地球規模の視点から取り組んでいくことが求められている。さらに、エネルギー資源・エネルギー技術や発電技術、都市安全技術などの科学技術の応用の考え方や社会における応用の実例についても、地球規模の視点から捉えることで最先端の技術動向を把握することが可能となる。

(4) ESD

この科目群では、〈地球〉を枠組みとした新しい教育運動であるESD(持続可能な開発のための教育)の本質と方法的な特徴を理解し、経済・社会システムの変更や人間のライフスタイルの変化を引き起こすために、われわれが、何を考え、何を变えなければいけないのかを考究する。個人主義的な教育観から小集団・構築主義的な教育観への変更、単一専門性幻想から共同的専門性へのパラダイムの転換など、これまでの常識をくつがえすための方法論を探究してゆく。学生・教員・学外者が、社会的活動やフィールドワークでの協働作業を通して、実践現場にふれながら、新しい動きとしてのESDに〈タッチ〉することが目標である。

(5) キャリア科目

現在、大学生には就職活動を始めるときに初めてキャリアについて考えるのではなく、入学時から卒業後・修了後のキャリアについて考え、深めていくことが求められている。この科目群では、実社会でのボランティアを通じて、あるいは実社会で活躍するOB/OG等社会人の講演を通じて、自己のキャリアに関して、またキャリアとは何かという問いそのものに関して考え、深めていくきっかけを掴み、将来に向けて備える能力を高めることを目標とする。

(6) 神戸学

この科目群では、我々の神戸大学が立地する神戸市・兵庫県、瀬戸内海等の歴史と現状に関する理解を深める、あるいは神戸大学そのものに関する理解を深めることを通じて、これからの学生生活を過ごすことになるキャンパス、地域についての理解と関心を深め、学生生活をより有意義にするとともに地域社会と大学とのかかわりについて理解することを目標とする。

(7) データサイエンス

ICT(情報化技術)の著しい進化により、インターネット等を通じて様々な情報が瞬時にやり取りされる時代となり、それらの情報はデータとして蓄積され、ビッグデータと呼ばれている。データサイエンスは、現在、様々な分野において、これらのデータの蓄積を処理・分析し、新しい価値を生み出すための新しい学問である。数学・統計学、情報科学・情報工学におけるデータ処理・分析の技術や、データから如何に有益な情報・価値を引き出すかという点に

において研究・実践が進展している。

この科目群においては数学・統計学、情報科学・情報工学におけるデータの処理・分析の基礎を身に着けるとともに、各専門分野におけるデータサイエンスの応用事例、社会との関わりを学び、データサイエンスの本質、汎用性そして問題点を理解することを目標とする。それらを発展させ、自らの専門分野や、社会における様々な分野において、課題を発見し、それを様々なデータを通じて解決するための基礎的能力を涵養することも目標とする。

歴史と文化教育部会は、以上の総合教養科目の中の(1) 多文化理解を構成する授業科目を担当する。その学習目標は以下の通りである。

人間は時間のなかに生きている。「今」は「過去」に、そして「未来」につながる。この流れのなかで、人間は自然との接点を持ち、さまざまな体験をしてきた。そこから共通なものを取り出し、記録し、蓄積する。次の世代は、その蓄積を利用しながら、また新たな体験を加えていく。この総体が文化にほかならず、そこにまた歴史感覚も生まれる。大学におけるさまざまな専門領域も、そうした文化が多様に連関しながら複雑化した網目の一隅を占めるものといえる。「歴史と文化」の名の下にある各科目は、政治と経済、法と社会、科学と技術、芸術とデザインといった個別の文化に焦点を合わせながらも、個別性を超えて、時間のなかに生きる人間の姿を見つめる感覚と能力を養うことを目標とする。それは同時に、履修者ひとりひとりの現在・過去・未来を、その人生の幅を超えて、世界の現在・過去・未来と関わらせる力でもあるだろう。

第2章 組織・運営体制

2.1 歴史と文化教育部会の沿革

昭和 38 (1963) 年	神戸大学教養部発足
平成 4 (1992) 年 10 月	教養部を改組し、大学教育研究センターを設置 人文科学教科集団内、歴史グループ発足
平成 5 (1993) 年 4 月	国際文化学部が先行的に全学共通授業科目を開始
平成 6 (1994) 年 4 月	大学教育研究センターにより全学共通授業科目開始
平成 17 (2005) 年 7 月	大学教育研究センターを大学教育推進機構に改組 全学共通教育の実施部局が新たに発足した全学共通教育部に移行 教科集団が教育部会になると同時に、歴史と文化教育部会が発足
平成 27 (2015) 年 4 月	全学共通教育部を改組し、国際教養教育院が発足
平成 28 (2016) 年 4 月	全学部生が卒業時に身につけるべき3つの能力「複眼的に思考する能力」、「多様性と地球的課題を理解する能力」、「協働して実践する能力」を「神戸スタンダード」として明示し、4年間の教養教育の目標とした。教養原論を「基礎教養科目」と「総合教養科目」に編成変え

2.2 歴史と文化教育部会の構成

令和 3 (2021) 年 10 月 1 日現在、各教育部会に参加している教員の延人数は以下の通りである。

1. 情報科学 32人
2. 健康・スポーツ科学 37人
3. 人間形成と思想 39人
4. 文学と芸術 23人
5. 歴史と文化 22人
6. 人間と社会 33人
7. 法と政治 15人
8. 経済と社会 40人
9. 数学 40人
10. 物理学 65人
11. 化学 75人
12. 生物学 47人

13. 地球惑星科学 19人
14. 図形科学 2人
15. 応用科学技術 16人
16. 医学 45人
17. 農学 50人
18. E S D 23人
19. データサイエンス 24人
20. 学際 81人
21. 外国語第I (英語) 32人
22. 外国語第II (独語 10人)
23. (仏語 9人)
24. (中国語 4人)
25. (ロシア語 1人) 計24人

合計 835 人

前回の自己評価を行った平成 27 (2013) 年 4 月 1 日時点で、教育部会参加教員人数は延 733 人であったから、この 8 年間で、より多くの教員が全学共通教育に参加するようになったと言える。

「歴史と文化」教育部会で授業を担当する教員は 22 名からなり、人文学研究科 12 名、国際文化学研究科 6 名、人間発達環境学研究科 4 名である。専門分野別では、日本史 5 名、東洋史 4 名、アジア史 2 名、西洋史 5 名、美術史 1 名、芸術史 4 名 (音楽 2 名、建築 1 名、服飾 1 名)、科学史 1 名となっており、いわゆる「歴史学」専門の教員が大半を占めるもののバラエティ豊かな科目が提供できる構成となっている。考古学については、担当できる専任教員がいないため、毎年 2 名の非常勤講師を依頼している。提供する科目名は以下の表の通りである。

総 合 教 養 科 目	(1) 多文化 理解	教育と人間形成	教育と人間形成	1	人間形成と思想
		文学	文学A	1	文学と芸術
			文学B	1	
		言語科学	言語科学A	1	
			言語科学B	1	
		芸術と文化	芸術と文化A	1	
			芸術と文化B	1	
		日本史	日本史A	1	歴史と文化
			日本史B	1	
		東洋史	東洋史A	1	
			東洋史B	1	
		アジア史	アジア史A	1	
			アジア史B	1	
		西洋史	西洋史A	1	
			西洋史B	1	
	考古学	考古学A	1		
		考古学B	1		
	芸術史	芸術史A	1		
		芸術史B	1		
	美術史	美術史A	1		
		美術史B	1		
	科学史	科学史A	1		
		科学史B	1		
	社会思想史	社会思想史	1	人間と社会	
	文化人類学	文化人類学	1		
	現代社会論	現代社会論A	1		
		現代社会論B	1		
	越境する文化	越境する文化	1		
	生活環境と技術	生活環境と技術	1	図形科学	
	学校教育と社会	学校教育と社会	1		
カタチの文化学	カタチの文化学A	1			
	カタチの文化学B	1			
(2) 自然 界の 成り 立ち	科学技術と倫理	科学技術と倫理	1	人間形成と思想	
	現代物理学が描く世界	現代物理学が描く世界	1	物理学	
	身近な物理法則	身近な物理法則	1	図形科学	
	カタチの自然学	カタチの自然学	1		
	ものづくりと科学技術	ものづくりと科学技術A	1	応用科学技術	
		ものづくりと科学技術B	1		
	生命科学	生命科学A	1	医学	
		生命科学B	1		
	生物資源と農業	生物資源と農業A	1	農学	
		生物資源と農業B	1		
生物資源と農業C		1			
生物資源と農業D		1			

提供科目が、A、B と分かれているのは、現行のクォーター制において、履修の最小単位が1クォーターすなわち 7.5 コマ分であることによる。

2.3 歴史と文化教育部会の運営

「歴史と文化」教育部会では、部会長 1 名が幹事 2 名の補佐を受けながら全体の統括・運営に当たっている。部会長は、月 1 回開催される国際教養教育委員会、及び内部委員会に出席する

とともに、教育部会におけるカリキュラム編成、自己評価・報告のとりまとめなどに当たっている。すべての部会構成員をメンバーとするメーリングリストを利用して、委員会での決定事項の連絡、依頼、意見交換を行うほか、必要に応じて幹事会や部会会議を開催し、情報共有、意思疎通を図っている。

部会長は人文学研究科、国際文化学研究科、人間発達環境学研究科の持ち回りで、部会長を出さない研究科には幹事が置かれる。部会長は原則として幹事経験者が就任することになっており、任期は1年であったが、平成27(2015)年度に始まる教養教育改革の際、当該年度の部会長、幹事に限っては3年任期となり、その後、平成28(2018)年より2年任期に変更され、現在に至っている。

歴史と文化部教育部会を構成する教員の専門分野は、「歴史と文化」教育部会の学習目標にもあるように、人間の営みを時間の中で捉える、つまり歴史的に思考するという点で共通点を有しており、比較的意志の疎通が測りやすいと考えられる。しかし地理的に離れた部局から編成されているので、できるだけ効率的な運営体制を心がけている。

2.3.1 現在の運営体制

部会長 緒形 康（人文学研究科・教授・東洋史）

幹事 貞好 康志（国際文化学研究科・教授・アジア史）

幹事 平芳 裕子（人間発達環境学研究科・准教授・芸術史）

2.3.2 歴代の部会長

年度	氏名	所属	職名
H17	須崎 慎一	国際文化学部	教授
H18	大津留 厚	文学部	教授
H19	中山 修一	人間発達環境学研究科	教授
H20	萩原 守	国際文化学研究科	教授
H21	市澤 哲	人文学研究科	教授
H22	中山 修一	人間発達環境学研究科	教授
H23	三浦 伸夫	国際文化学研究科	教授
H24	百橋 明穂	人文学研究科	教授
H25	梅宮 弘光	人間発達環境学研究科	教授
H26	塚原 東吾	国際文化学研究科	教授
H27-29	高田 京比子	人文学研究科	准教授
H30-R1	大田 美佐子	人間発達環境学研究科	准教授
R2-R3	緒形 康	人文学研究科	教授

2.3.3 担当授業コマ数（週あたり）

令和3（2021）年度の授業科目と担当授業コマ数は以下の通りである。（なお、表の0.5コマとは1Qの7.5回〔1回、90分〕分の授業時間を指す。）

年度	学期	科目名	合計	非常勤講師	人文学研究科	国際文化学研究科	人間発達環境学研究科
2021	1Q	日本史 A	1.5		0.5	1	
2021	1Q	東洋史 B	0.5		0.5		
2021	1Q	アジア史 A	1			1	
2021	1Q	西洋史 A	1		0.5	0.5	
2021	1Q	西洋史 B	0.5		0.5		
2021	1Q	考古学 A	0.5	0.5			
2021	1Q	芸術史 A	0.5				0.5
2021	1Q	芸術史 B	0.5				0.5
2021	1Q	科学史 A	0.5			0.5	
2021	2Q	日本史 B	1.5		0.5	1	
2021	2Q	東洋史 B	0.5		0.5		
2021	2Q	アジア史 B	1			1	
2021	2Q	西洋史 A	0.5		0.5		
2021	2Q	西洋史 B	0.5		0.5	0.5	
2021	2Q	考古学 B	0.5	0.5			
2021	2Q	芸術史 A	0.5				0.5
2021	2Q	芸術史 B	0.5				0.5
2021	2Q	科学史 A	0.5			0.5	
2021	3Q	日本史 A	1	1			
2021	3Q	東洋史 B	0.5		0.5		
2021	3Q	アジア史 A	1				
2021	3Q	西洋史 B	0.5			0.5	
2021	3Q	考古学 A	0.5	0.5			
2021	3Q	美術史 A	0.5		0.5		
2021	3Q	科学史 A	0.5		0.5		
2021	4Q	日本史 B	1	1			
2021	4Q	東洋史 B	0.5		0.5		

2021	4Q	アジア史 B	1			1	
2021	4Q	西洋史 B	0.5		0.5		
2021	4Q	考古学 B	0.5	0.5			
2021	4Q	美術史 B	0.5		0.5		
2021	4Q	科学史 B	0.5			0.5	

○令和3(2021)年度の担当授業コマ数

2021	1Q	6.5
2021	2Q	6.5
2021	3Q	4.5
2021	4Q	4.5
	年間	22

年間 22 コマの授業につき、令和 3 (2021) 年度は 22 名の専任教員および 4 名の非常勤で担っているが、部会構成員の中には他の部会と兼務している教員もあり、また歴史的経緯によって、均等に負担しているわけでは必ずしもない。来年度はアジア史の教員一人が退職し、また今後、非常勤枠が減少の一途を辿り、後任補充の間隔が 2 年 6 か月に延長された中で、どのようにコマ数に見合った授業編成を行ってゆくかが課題である。

2.3.4 支援体制

「歴史と文化」教育部会には、助教や支援職員はいないが、TA を活用することによって、大人数の講義における小テストの実施などが効率よく行えるよう工夫している。令和 2 (2020) 年度以後、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、「神戸大学の活動制限指針」を設け、そこに明記されたレベルに照応した雇用のみを認めている。

(1) 学部生の雇用

「神戸大学の活動制限指針」においてレベル 1 以上と判断された場合は、学部生の雇用を見合わせるものとする。

(2) 大学院生の雇用

大学院生をティーチング・アシスタントとして雇用することが必要な場合は、「神戸大学の活動制限指針」に基づき、レベル 2 以下と判断された場合に限り大学で勤務することができるものとし、レベル 3 以上の場合は、原則として、自宅で行うことのできる業務について雇用するものとする。

「新型コロナウイルス感染拡大防止のための神戸大学の活動制限指針」

(授業〔講義・演習・実習〕)

レベル1：遠隔授業を含め、対面授業を開講。ただし、講義、演習、実験又は実習について、対面により実施する場合は、部局により、十分な感染防止措置を講じること

レベル2：遠隔授業を含め、対面授業を開講。ただし、講義、演習、実験又は実習の一部について、部局の判断に基づき、十分な感染防止措置を講じた上で、対面により実施することは可

レベル3：原則として遠隔授業のみ

レベル4：遠隔授業のみ

レベル5：原則として全ての授業科目の開講を中止

令和1(2019)年度は、1Q・2Qで2人、3Q・4Qで2人の雇用実績がある。実施報告書によれば、業務の実施に当たって、「業務内容を担当教員に確認しましたか」、「授業内容に関して担当教員と打ち合わせましたか」、「事前に機器の操作方法を確認しましたか」という質問に対して、全て「はい」と回答しており、業務が円滑に遂行できたことが示されている。

業務従事による成果については、「TA従事によって本格的に大学の授業に触れることができ、学部生に対してどのように授業をすれば良いかを学んだ。授業科目の内容は、日本と中国の近代化プロセスを比較するもので、従事者自身の、日本と中国の近代化の相違点についての研究活動活かすことができた」、「担当教員の講義中の質問に対する指導方法について勉強した」、といったTA自身の成果の記入がある。制度の改善点をめぐっては特に意見はなかった。なお、令和2(2020)年度、令和3(2021)年度は、「歴史と文化」教育部会が提供する科目が全て「遠隔授業(オンデマンド型とリアルタイム型の両者を含む)」となったために、TAの雇用実績はない。

第3章 授業の実態

3.1 科目一覧と概要

各教育部会は提供する科目の一覧と概要をホームページに掲げている。歴史と文化教育部会の科目一覧と概要は以下の通りである。

日本史：

日本社会の歴史的特質を、古代から現代にわたる各時代の政治、社会や生活文化の動的な分析を通してあきらかにする。

東洋史：

ヨーロッパを除いたユーラシア大陸の全域における、複数の文明と宗教、多数の民族と言語を考察し、そこに生まれた政治・文化・経済の動態をあきらかにする。

アジア史：

多様な展開を見せているアジアの各地域の歴史に即しつつ、その域内外の相互連環を重視し、統治構造や社会関係、文化をとらえる。

西洋史：

ヨーロッパを中心に古代、中世、近代の歴史に即して、その時代の統治構造や社会関係、生活文化をとらえる。

考古学：

歴史的遺跡、遺物保存の方法を紹介しながら、当時の社会の実態を復元するとともに、その社会構造や生活文化についても考察する

美術史：

文字資料には表れない思想や社会・歴史が表象された美術作品という視覚資料を素材に、美術だけでなく、西洋文化全体の基礎をなすキリスト教についても学習し、イメージと信仰、視覚表現と思想との関係について理解する。

芸術史：

人間はこれまでさまざまな方法で芸術表現を行い、受容してきた。美術、音楽、デザイン、ファッションなどの領域において、時代や地域の文化的文脈を解明しながら芸術の歴史を考察する。

科学史：

現代における科学技術文明の功罪を省察し、さらに未来への展望を得るために、東西における科学、技術、医学の成立、展開、受容を歴史的具体的に検証し、それらが社会や文化に及ぼした影響を総合的に考察する。

3.2 履修状況

過去2年間（令和2（2020）年度、令和3（2021）年度）における歴史と文化教育部会の授業科目の履修者数は以下の通りである。

歴史と文化教育部会の授業科目の履修者数（2020～2021）

年度	学期	曜日	時限	科目名	担当教員所属	担当教員	履修者数
2020	1Q	月	1	日本史 A	国際文化学研究科	長 志珠絵	72
2020	1Q	月	1	西洋史 A	国際文化学研究科	小澤 卓也	104
2020	1Q	月	1	芸術史 A	人間発達環境学研究科	梅宮 弘光	72
2020	1Q	月	1	科学史 A	国際文化学研究科	塚原 東吾	45
2020	1Q	火	1	日本史 A	国際文化学研究科	長 志珠絵	8
2020	1Q	火	1	アジア史 A	国際文化学研究科	貞好 康志	7
2020	1Q	火	1	西洋史 A	人文学研究科	佐藤 昇	9
2020	1Q	火	1	考古学 A	非常勤講師	伊藤 淳史	49
2020	1Q	火	1	芸術史 B	人間発達環境学研究科	平芳 裕子	32
2020	1Q	木	2	日本史 A	人文学研究科	古市 晃	20
2020	1Q	木	2	アジア史 A	国際文化学研究科	萩原 守	21
2020	1Q	木	2	西洋史 A	人文学研究科	小山 啓子	15
2020	2Q	月	1	日本史 B	国際文化学研究科	長 志珠絵	119
2020	2Q	月	1	西洋史 B	国際文化学研究科	小澤 卓也	66
2020	2Q	月	1	芸術史 A	人間発達環境学研究科	梅宮 弘光	126
2020	2Q	月	1	科学史 B	国際文化学研究科	塚原 東吾	67
2020	2Q	火	1	日本史 B	国際文化学研究科	長 志珠絵	68
2020	2Q	火	1	アジア史 B	国際文化学研究科	貞好 康志	38
2020	2Q	火	1	西洋史 A	人文学研究科	佐藤 昇	87
2020	2Q	火	1	考古学 B	非常勤講師	伊藤 淳史	200
2020	2Q	火	1	芸術史 B	人間発達環境学研究科	平芳 裕子	154
2020	2Q	木	2	日本史 B	人文学研究科	市澤 哲	58
2020	2Q	木	2	アジア史 B	国際文化学研究科	萩原 守	30
2020	2Q	木	2	西洋史 B	人文学研究科	小山 啓子	35
2020	3Q	月	2	日本史 A	非常勤講師	小野塚 航一	51
2020	3Q	月	2	アジア史 A	国際文化学研究科	貞好 康志	32
2020	3Q	火	1	東洋史 B	人文学研究科	真下 裕之	137
2020	3Q	水	1	日本史 A	国際文化学研究科	辛島 理人	165

2020	3Q	水	1	西洋史 B	非常勤講師	立川ジェームズ	112
2020	3Q	水	2	東洋史 A	非常勤講師	安田 純也	81
2020	3Q	木	2	アジア史 A	国際文化学研究科	萩原 守	73
2020	3Q	木	2	考古学 A	非常勤講師	李 陽浩	117
2020	3Q	木	2	美術史 A	人文学研究科	宮下 規久朗	53
2020	3Q	木	2	科学史 A	国際文化学研究科	塚原 東吾	15
2020	4Q	月	2	日本史 B	非常勤講師	小野塚 航一	56
2020	4Q	月	2	東洋史 B	人文学研究科	真下 裕之	52
2020	4Q	月	2	アジア史 B	国際文化学研究科	貞好 康志	30
2020	4Q	水	1	日本史 B	国際文化学研究科	辛島 理人	200
2020	4Q	水	1	西洋史 B	非常勤講師	立川ジェームズ	182
2020	4Q	水	2	東洋史 A	非常勤講師	安田 純也	52
2020	4Q	木	2	アジア史 B	国際文化学研究科	萩原 守	54
2020	4Q	木	2	考古学 B	非常勤講師	李 陽浩	84
2020	4Q	木	2	美術史 B	人文学研究科	増記 隆介	102
2020	4Q	木	2	科学史 B	国際文化学研究科	塚原 東吾	18
2021	1Q	月	1	日本史 A	国際文化学研究科	長 志珠絵	84
2021	1Q	月	1	西洋史 A	人文学研究科	高田 京比子	108
2021	1Q	月	1	芸術史 A	人間発達環境学研究科	谷 正人	100
2021	1Q	月	1	科学史 A	国際文化学研究科	塚原 東吾	29
2021	1Q	火	1	日本史 A	国際文化学研究科	長 志珠絵	32
2021	1Q	火	1	アジア史 A	国際文化学研究科	貞好 康志	9
2021	1Q	火	1	東洋史 B	人文学研究科	伊藤 隆郎	90
2021	1Q	火	1	西洋史 A	国際文化学研究科	小澤 卓也	11
2021	1Q	火	1	考古学 A	非常勤講師	伊藤 淳史	48
2021	1Q	火	1	芸術史 B	人間発達環境学研究科	大田 美佐子	38
2021	1Q	木	2	日本史 A	人文学研究科	古市 晃	10
2021	1Q	木	2	西洋史 B	人文学研究科	藤澤 潤	18
2021	1Q	木	2	アジア史 A	国際文化学研究科	萩原 守	10
2021	2Q	月	1	日本史 B	国際文化学研究科	長 志珠絵	106
2021	2Q	月	1	西洋史 A	人文学研究科	高田 京比子	145
2021	2Q	月	1	芸術史 A	人間発達環境学研究科	谷 正人	76
2021	2Q	月	1	科学史 A	国際文化学研究科	塚原 東吾	35
2021	2Q	月	1	東洋史 A	人文学研究科	緒形 康	50
2021	2Q	火	1	日本史 B	国際文化学研究科	長 志珠絵	62

2021	2Q	火	1	アジア史 B	国際文化学研究科	貞好 康志	16
2021	2Q	火	1	西洋史 B	国際文化学研究科	小澤 卓也	33
2021	2Q	火	1	考古学 B	非常勤講師	伊藤 淳史	145
2021	2Q	火	1	芸術史 B	人間発達環境学研究科	大田 美佐子	50
2021	2Q	木	2	日本史 B	人文学研究科	市澤 哲	46
2021	2Q	木	2	アジア史 B	国際文化学研究科	萩原 守	18
2021	2Q	木	2	西洋史 B	人文学研究科	藤澤 潤	50
2021	3Q	月	2	日本史 A	非常勤講師	タタルチュク マルタン	78
2021	3Q	月	2	東洋史 B	人文学研究科	伊藤 隆郎	96
2021	3Q	月	2	アジア史 A	国際文化学研究科	貞好 康志	19
2021	3Q	水	1	西洋史 B	国際文化学研究科	小澤 卓也	71
2021	3Q	木	2	アジア史 A	国際文化学研究科	萩原 守	46
2021	3Q	木	2	考古学 A	非常勤講師	竹内 一博	100
2021	3Q	木	2	美術史 A	人文学研究科	宮下 規久朗	44
2021	3Q	木	2	科学史 A	国際文化学研究科	塚原 東吾	24
2021	3Q	木	2	日本史 A	非常勤講師	山本 昭宏	200
2021	4Q	月	2	日本史 B	非常勤講師	タタルチュク マルタン	121
2021	4Q	月	2	アジア史 B	国際文化学研究科	貞好 康志	39
2021	4Q	水	1	東洋史 A	人文学研究科	緒形 康	186
2021	4Q	水	1	西洋史 B	国際文化学研究科	小澤 卓也	59
2021	4Q	木	2	日本史 B	非常勤講師	山本 昭宏	173
2021	4Q	木	2	アジア史 B	国際文化学研究科	萩原 守	45
2021	4Q	木	2	考古学 B	非常勤講師	竹内 一博	140
2021	4Q	木	2	美術史 B	非常勤講師	橋本 寛子	47
2021	4Q	木	2	科学史 B	国際文化学研究科	塚原 東吾	13

歴史と文化の授業科目は、全学、とりわけ理系の学生にも幅広く提供されており（例えば、月曜 1 限は工学部、海事科学部、医学部の学生などが履修する時間帯となっている）、文系理系を問わず、多くの学生が履修している。一方で、履修者数が上限最大人数の 200 人、あるいはそのぎりぎりに達する授業が 4 つある。逆に学生総数が少ない時間帯は、授業の規模が少なくなっている。履修人数のばらつきを均等化する何らかの工夫が必要である。

3.3 成績評価

教養原論の成績評価については、以下の神戸大学の規則が適用されている。

第4条 授業科目の成績は、100点を満点として次の区分により評価し、秀、優、良及び可を合格、不可を不合格とする。

秀(90点以上)

優(80点以上 90点未満)

良(70点以上 80点未満)

可(60点以上 70点未満)

不可(60点未満)

2 秀、優、良、可及び不可の評価基準は、次の各号のとおりとする。

- | | |
|--------|--------------------------|
| (1) 秀 | 学修の目標を達成し、特に優れた成果を収めている。 |
| (2) 優 | 学修の目標を達成し、優れた成果を収めている。 |
| (3) 良 | 学修の目標を達成し、良好な成果を収めている。 |
| (4) 可 | 学修の目標を達成している。 |
| (5) 不可 | 学修の目標を達成していない。 |

期末試験、平常点の配分や、小テストの有無などは、各教員に委ねられており、詳細はシラバスを参照されたい。

秀の比率を10%以下、秀・優の比率を併せて40%以下に抑えるという、全学の取り決めについて述べれば、秀は10%以下に抑えられているものの、秀・優の合計比率は、ここ数年42-43%台で推移しており、何らかの改善方法を考えることが求められている。

3.4 シラバス

以下に、令和3年度3Qに開講した10科目をシラバス例として掲げる。

開講科目名	日本史A			
担当教員	タタルチュク マルチン		開講区分	単位数
ナンバリングコード	U1BB100	曜日・時限	月2	第3クォーター 1.0単位
			時間割コード	3U058
<p>授業のテーマ</p> <p>日本文化の形成史：特有文化の作られ方</p>				
<p>授業の到達目標</p> <p>この授業では、国の特有の伝統文化は自然と「ある」ものではなく、「作られていく」ものだとして理解し、その過程で生じる諸問題を意識し、それらについて考察できるようになることを目標とする。</p>				
<p>授業の概要と計画</p> <p>日本特有の伝統文化・歴史の象徴である京都は古くから歴史の大舞台、国政の中心であり、また近代以降には一国家としての日本のアイデンティティを模索する場としても非常に重要な土地であった。観光都市としても名高い京都は、各時代の社会事情によって求められた、作られた、それぞれ異なる「京都」像の創出によって様々な側面を持ちその地位を確立してきた。こうした複数のイメージの積み重ねが、現在私たちが当たり前に見ている京都観光の姿を築いたのだ。この授業では、京都文化の変遷をたどり、日本「特有」の伝統文化や地域性の創造と観光地化問題を考える。</p> <p>第1回：日本「特有」の伝統文化の始まり 第2回：明治時代の京都と「国風文化」 第3回：万国博覧会と日本のイメージ 第4回：外国人と日本文化 第5回：戦前の日本と「観光」の誕生 第6回：戦後の日本と文化の再発見、伝統文化と女性 第7回：新たな日本「特有」文化 第8回：まとめ・最終レポート</p>				
<p>成績評価方法</p> <p>最終レポート50%、各授業の小レポート50%で評価する。</p>				
<p>成績評価基準</p> <p>授業で取り上げた文化の作られ方に伴う諸問題を理解しているか、自分から例を挙げ問題について論理的に考察できているかを基準にする。</p>				
<p>履修上の注意（関連科目情報）</p> <p>神戸大学のオンライン教育システムを用いて、録画した講義を提供するというオンデマンド形式となる。</p>				
<p>事前・事後学修</p> <p>事前学修：各回の授業で取り扱う項目について、事前掲載した資料の関係する部分を讀んだ上で、疑問点をまとめておくこと 事後学修：授業で取り扱った部分を再考し、各回授業で出された課題について小レポートを出すこと</p>				
<p>オフィスアワー・連絡先</p> <p>メールにて受け付けをします。 tatarczuk.marcin.34@st.kyoto-u.ac.jp</p>				
<p>学生へのメッセージ</p>				
<p>今年度の工夫</p>				

教科書	BEEFで資料を配付します。
参考書・参考資料等	特になし
授業における使用言語	日本語
キーワード	遠隔授業

開講科目名	東洋史B				
担当教員	伊藤 隆郎			開講区分	単位数
				第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	月2	時間割コード	3U060
授業のテーマ イスラーム世界の歴史と文化					
授業の到達目標 中東を中心に、イスラーム世界の歴史・社会・文化に関する基礎的知識を身につけることを目標とする。					
授業の概要と計画 遠隔オンデマンド型で授業を行う。 イスラームとはどのような宗教なのか、またイスラーム世界はどのような歴史をたどり、どのような社会や文化を形成してきたのかについて概説する。 1. イントロダクション 2. 中東と日本 3. 預言者ムハンマドとコーラン 4. イスラームの信仰と実践 6. シア派とスンナ派 7. 現代中東の諸問題 8. まとめ					
成績評価方法 講義資料（動画）の視聴と毎回の小レポートによる（100%）。					
成績評価基準 3回以上の課題の不提出（遅延も含む）で不可。 講義の内容を正確に理解できているかを小レポートによって評価し、通算で60%以上できていれば合格とする。					
履修上の注意（関連科目情報） 特になし					
事前・事後学修 事前学修：授業で紹介した参考文献を読んだ上で疑問点をまとめておくこと。 事後学修：参考文献を再読し、授業で学んだことを確認すること。 本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。					
オフィスアワー・連絡先 質問や相談はメールまたはBEEFのメッセージをお願いします。					
学生へのメッセージ 					
今年度の工夫 					

教科書	なし
参考書・参考資料等	授業で紹介する
授業における使用言語	日本語
キーワード	イスラーム ムスリム 中東 遠隔授業

開講科目名	アジア史 A				
担当教員	貞好 康志			開講区分	単位数
				第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	月2	時間割コード	3U062
<p>授業のテーマ</p> <p>東南アジアにおける人の移動（前近代篇）</p>					
<p>授業の到達目標</p> <p>東南アジアにおける中国系移民（華僑・華人）を事例に、人の移動と歴史のダイナミズムについての基本的な理解を得ることを目標とする。</p>					
<p>授業の概要と計画</p> <p>毎回Zoomを利用したリアルタイムの遠隔授業を行なう予定です。なお、新型コロナウイルスの感染状況によっては、授業形態を変更する場合があります。その場合はBEEF等によって通知します。</p> <p>各回の内容は以下の通り：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 趣旨説明：人の移動と歴史（前近代まで） 2. アジアの移動史における華僑・華人 3. 東南アジアの前近代史 4. 東南アジアの港市国家 5. 華僑を生んだ華南（南中国）の社会 6. 漢民族の伝統的な社会結合 7. 補足説明（質疑に応える回） 8. まとめ・試験 					
<p>成績評価方法</p> <p>平常点（60%）、期末レポート（40%）を目安とします。平常点は出席を大前提に、不定期の小テスト（コメントシートの提出）や、オンラインのやりとり（質疑と応答）でのパフォーマンスを加味して評価します。期末レポートの詳細については学期末が近づいてからBEEF上で提示します。</p>					
<p>成績評価基準</p> <p>筆記試験・小テストともに、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業で述べた歴史的事実の理解度 ・ 事実と事実の相関関係の理解度 ・ 先学の諸説に対する批判の適切さを基準に評価します。 					
<p>履修上の注意（関連科目情報）</p> <p>第4クォーターでアジア史B（近現代篇）を続けて履修することを、義務ではないが推奨します。</p>					
<p>事前・事後学修</p> <p>「人の移動」が授業を通過するテーマですので、移民や文化摩擦などに関わるメディア報道などにもアンテナを張り、身の回りを観察しておくことが何よりの予習となるでしょう。毎回紹介する参考文献の一冊でも事後に探して読むことが最上の復習、自己学習になります。本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。</p>					
<p>オフィスアワー・連絡先</p> <p>月曜昼休み、ysd@kobe-u.ac.jpへ予め一報ください。</p>					

<p>学生へのメッセージ</p> <p>アセアン共同体の実現にもみられるように今後の世界を牽引する地域のひとつとなるだろう東南アジア。その際にアセアン内外をネットワークで結ぶ華僑・華人の役割は重要です。「人の移動」という主題のもと、東南アジアや華僑・華人について学んでおくことは、卒業後「実用的」にも役立つかもしれません。</p>
<p>今年度の工夫</p> <p>諸外国の歴史的な事象を扱うことが多いので、具体的なイメージを喚起できるよう、写真や画像資料の類を適宜用いる予定。</p>
<p>教科書</p> <p>毎回、自作レジュメのPDFをBEEF上にアップする予定。 / : , , ISBN:</p> <p>参考書・参考資料等</p> <p>毎回の話題に関連する参考文献をレジュメの末尾で紹介いたします。 / : , , ISBN:</p>
<p>授業における使用言語</p> <p>日本語 日本語</p>
<p>キーワード</p> <p>遠隔授業 華僑・華人 東南アジア 人の移動</p>

開講科目名	西洋史B				
担当教員	小澤 卓也		開講区分	単位数	
			第3クォーター	1.0単位	
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	水1	時間割コード	30064
授業のテーマ 19世紀中頃～20世紀末のパンマ運河をめぐる中米諸国（特にニカラグアとパナマ）とアメリカ合衆国の歴史的關係を、主に中米側のナショナリズムの視点から分析・検討することをテーマとする。					
授業の到達目標 受講生が、旧植民地側の視点から西洋近代史を建設的批判精神をもって論じるための具体的な知識（特に植民地主義とナショナリズムの關係に関する知識）と分析視角を身につける。					
授業の概要と計画 オンライン・リアルタイム授業で、以下の順に授業を進めていく予定である。授業URLは、BEEFを通じて前日までに受講生に知らせる。授業用レジュメも、授業の前日までにBEEFを通じて受講生に配布する。					
第1週 国民とは何か？ 第2週 中米運河建設計画とニカラグア 第3週 ニカラグア・ナショナリズムと反米主義 第4週 パナマ独立と運河建設計画 第5週 パナマ運河と国旗をめぐる対立 第6週 パナマ運河返還をめぐる真実 第7週 中米における運河建設の歴史的遺産 第8週 授業のまとめと定期試験					
成績評価方法 授業への積極的な参加を前提に、毎回の授業後、受講生にBEEFを通じて課題（期限付。実際の授業内容に即したテーマ）を提出してもらい、その総合評価にて成績評価を行う（100%）。					
成績評価基準 単に講義に出席しているだけでなく、授業中に提示された諸問題に対してつねに自立的かつ積極的に思考しているか否かが重要である（単なる暗記だけで高い評価は得られない）。評価は、授業内容（特に歴史的文脈）の理解度（25%）、論理性（25%）、客観性（25%）、思考の独創性（25%）によってなされる。課題の提出期限は厳守すること（特別な事情がないかぎり受け付けない）。					
履修上の注意（関連科目情報） （1）高校の世界史ではまったくといって良いほど取り上げられていない国/地域が主な対象となっている点に注意（ネット情報を少し見ただけで理解できる一般的な内容ではない）。 （2）第1週目に本講義の根幹に関わる解説をしますので、履修者は必ず出席すること（ただし、大学側が公認する何らかの理由がある場合、その限りではない）。 （3）成績評価に関して、大学が公認する以外の理由はこれを一切考慮しない。					
事前・事後学習 本講義を履修するにあたり、事前学習として小澤卓也『先住民と国民国家』（有志舎）の第II部を読んでおくことが望ましい（詳しくは下記の教科書欄を参照されたい）。事後学習は、授業で取り扱った部分を教科書や参考書で再読し、授業で学んだことについてまとめること（BEEFなどで指示する）。 本学では1単位あたりの学習時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学習・事後学習を行ってください。					
オフィスアワー・連絡先 水曜3限（相談に際してはあらかじめメール等でアポイントメントをとっていただきたい） ozataku(AT)harbor.kobe-u.ac.jp 研究室は国際人間科学部グローバル文化学科の研究棟2階・E211である。					

学生へのメッセージ まずは本講義に関する詳細情報をしっかりと読んでいただきたい。本学における教養教育のレベルアップを目指して成績評価の基準は高く設定しているので、納得のうえ履修していただきたい。
今年度の工夫 新しい写真や資料の充実。
教科書 1つの教科書を定めるのではなく、下記に挙げた「3点の参考文献」の内容を組み合わせて講義を行う。
参考書・参考資料等 本講義で紹介される基本情報の多くは、下記の参考書に基づいたものである。ただし、授業中に必要不可欠な資料については、できるだけこちらでプリントにコピーして授業中に配布する。
パナマを知るための55章 / 国本伊代・小林志郎・小澤卓也：明石書店，2004，ISBN:4750319643 教養のための現代史入門 / 小澤卓也・田中聡・水野博子：ミネルヴァ書房，2015，ISBN:9784623072637 先住民と国民国家：中央アメリカのグローバル・ヒストリー / 小澤卓也：有志舎，2007，ISBN:9784903426075
授業における使用言語 日本語
キーワード ニカラグア パナマ アメリカ合衆国 運河 植民地主義 ナショナリズム

開講科目名	アジア史A				
担当教員	萩原 守			開講区分	単位数
				第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	U1BB100	曜日・時間	木2	時間割コード	3U063
授業のテーマ					
この授業のテーマは、「モンゴル高原の古代史」である。					
授業の到達目標					
到達目標は、モンゴル高原で暮らす騎馬遊牧民たちの歴史と彼らが中国や西アジア、ヨーロッパ等の地域におよぼした大きな影響とをしっかり理解することである。					
授業の概要と計画					
現在の所、通常の対面授業を予定しているが、ZOOM授業となる可能性もある。					
<ol style="list-style-type: none"> 1. 狩猟、農耕、遊牧の発生 2. 中央ユーラシアを貫く草原の帯 3. モンゴル高原の古代遺跡：鹿石・ヒルギスルと板石墓 4. スキタイの出自 5. 匈奴、月氏、東胡 6. フン族のヨーロッパ侵入 7. 鮮卑、柔然、突厥、ウイグル、契丹とその言語 8. まとめ・試験 					
成績評価方法					
学期末に、持ち込み可能な試験を実施する。その試験の成績を9割、出席点を1割程度として、総合的に評価する。					
成績評価基準					
試験問題に対する答案が、いかに正確にいかにか詳しく論述されているか、という点を重視する。すなわち、事実の把握を重視すること。地図のみとか、系図のみとか、歴史上の用語を線や矢印でつないだだけというような意味不明の答案では、単位を認めることはできない。必ず、文章で詳しく回答すること。					
履修上の注意（関連科目情報）					
現在の所、通常の対面授業を予定しているが、ZOOM授業となる可能性もある。					
この科目はグローバル人材を育成するために異文化や日本文化を理解する能力を培うグローバル共通科目である。					
学期末に持ち込み可能な試験を実施するので、毎回、必ず詳細にノートを取ること。試験時には、必ず文章で大量に記述解答すること。記号や単語のみの解答、数行のメモ書き程度の解答は、認められない。また、授業中に指示する参考文献を読むなどの準備学習を普段から行い、特に試験前には十分な復習しておくことを勧める。					
事前・事後学修					
授業中に参考文献を指示するので、是非とも、読んできてほしい。特に試験前には、ノートや参考文献等をよく読み直しつつ、それまでの授業内容を復習しておいてほしい。 本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。					
オフィスアワー・連絡先					
月曜・木曜の昼休み 研究室はE-206					
学生へのメッセージ					
出席は当然重要ですが、出席していても、ノートをとらないでいると、詳しい答案は書けません。また、わからなかった部分は、すぐその時に質問しておくこと。そこが試験に出るかもしれません					
今年度の工夫					
配布する地図を活用して、モンゴル高原とヨーロッパ方面とをつなぐような授業にしたい。					

教科書	特になし。
参考書・参考資料等	授業中にも指示する。 スキタイと匈奴 遊牧の文明 / 林 俊雄：講談社学術文庫、2017、ISBN:9784062923903 大月氏 中央アジアに謎の民族を尋ねて / 小谷伸男：東方書店、2010、ISBN:9784497210050 遊牧国家の誕生 / 林 俊雄：山川出版社 世界史リブレット、2009、ISBN:9784634349360
授業における使用言語	日本語
キーワード	グローバル 草原 古代遺跡 遊牧民 民族移動 言語交代

開講科目名	考古学A				
担当教員	竹内 一博		開講区分	単位数	
			第3クォーター	1.0単位	
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	木2	時間割コード	3U065
授業のテーマ 本授業では、考古学の基本的な考え方や研究方法について学ぶ。また、ギリシア考古学の具体的な研究事例を取り上げることで、学問としての考古学の今日的な意義と課題について理解することを目的とする。					
授業の到達目標 1. 考古学という学問の基本を理解し、説明できるようになる。 2. ギリシア考古学に対する理解を深め、複眼的なものの見方を養うことを目標とする。					
授業の概要と計画 本授業は「遠隔（オンデマンド型）」で行う。授業は以下のように進める予定である。 1. 考古学とはどんな学問か 2. 考古学の歴史と多様性 3. 機能論・編年論・分布論 4. ギリシア考古学(1)：その変遷と現在 5. ギリシア考古学(2)：考古資料と歴史史料 6. ギリシア考古学(3)：社会をよむ（奉納と供犠） 7. ギリシア考古学(4)：文化財とアイデンティティ 8. 補足とまとめ					
成績評価方法 レポート試験60%、各授業のコメントシート40%で評価する。					
成績評価基準 レポート試験では、主に次の点を評価基準とする。 1. 考古学の基本概念や研究方法を理解できているか。 2. ギリシア考古学の特徴を捉え、的確に説明できているか。 コメントシートは、毎回の授業内容に関する理解の程度を評価する。					
履修上の注意（関連科目情報） 毎回授業終了時に、コメントシートの提出を求める。					
事前・事後学修 事前に下記の参考書のいずれかを読み、基本事項の理解を深めておくこと。また、授業時に提示する参考文献を調べ、読み進めることで、関心を広げること。					
オフィスアワー・連絡先 メールにて随時受け付ける。					
学生へのメッセージ 					
今年度の工夫 毎回キーワードを提示するとともに、授業のねらいを設定する。					
教科書 特定の教科書は使用しない。BEEFで資料を配付する。					

参考書・参考資料等 下記以外にも、授業中に随時参考文献を紹介する。 はじめて学ぶ考古学 / 佐々木康一ほか：有斐閣、2011年、ISBN:9784641124349 考古学：その方法と現状 / 奥拓良・上原真人編：放送大学教育振興会、2009年、ISBN:9784595309137 ギリシアの考古学 / 周藤芳幸：同成社、1997年、ISBN:4886211526 授業における使用言語 日本語 キーワード 考古学、歴史学、縄文学、ギリシア、エーゲ海、ボリス、遠隔授業
--

開講科目名	美術史 A		
担当教員	宮下 規久朗	開講区分	単位数
		第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	木2 時間割コード 30066
授業のテーマ			
美術史学の基礎とキリスト教			
授業の到達目標			
美術史学の基礎を通して、西洋文化の根幹であるキリスト教と美術、さらに両者の関係について理解する。			
授業の概要と計画			
美術作品（イメージ）は、文字資料には表れない思想や社会・歴史が表象された視覚資料である。美術だけでなく、西洋文化全体の基礎をなすキリスト教についてしっかり学習し、イメージと信仰、視覚表現と思想との関係について理解する。対象とする美術作品は西洋の古代から現代美術、日本美術におよぶ。それによって美術史学という学問の基礎を学ぶ。また、テキストに指定したものと教員による著書を課題として読むことを課す。			
1 イントロダクション 美術史とは何か 2 美術史学の方法 3 キリスト教と西洋文化 4 聖像と偶像 5 聖像と偶像（2） 6 聖母と美術 7 聖母聖像の諸相 8 まとめ・試験 実施形態 遠隔授業（リアルタイム）			
成績評価方法			
毎回の出席点および感想レポート、期末試験			
成績評価基準			
毎回の出席点および感想レポート30%、期末試験70%。試験は授業の基本的な内容の理解をはかるものである。ただし、出席が足りない者は試験を受けられない。毎回必ず出席し、授業内容をしっかり理解しているかをその都度判断する。			
履修上の注意（関連科目情報）			
毎回の出席を重視し、スライドで作品を見て自分の感想や意見などを求めるため、美術に興味のない学生は履修しないこと。			
事前・事後学修			
テキスト・参考文献を必ず購入して読むこと。指定された展覧会があれば訪れること。本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。			
オフィスアワー・連絡先			
火曜日・水曜日の5時 文学部C棟5階 宮下研究室または美術史研究室			
学生へのメッセージ			
スライドを見て頻繁に発言を求めらるので、美術に興味があり、積極的に授業にのぞむ姿勢の者に限る。私語や居眠り、遅刻には厳しく対処し、出席点から減点するか落第させる。			
今年度の工夫			
なし			

教科書
バロック美術の成立 / 宮下規久朗：山川出版社，2003，ISBN:9784634347700 聖母の美術全史 / 宮下規久朗：筑摩書房，2021，ISBN:9784480074010
参考書・参考資料等
モチーフで読む美術史 1, 2 / 宮下規久朗：筑摩書房，，ISBN:9784480430762 そのとき、西洋では一時代で比べる日本美術と西洋美術 / 宮下規久朗著：小学館，2019，ISBN:9784096822746 しぐさで読む美術史 / 宮下規久朗：筑摩書房，，ISBN:9784480433183
授業における使用言語
日本語
キーワード
聖像 イコン、キリスト教 聖母 イメージ バロック 遠隔授業（リアルタイム）

開講科目名	科学史A			開講区分	単位数
担当教員	塚原 東吾			第3クォーター	1.8単位
ナンバリングコード	2188188	曜日・時間	木2	時間割コード	31867
授業のテーマ					
イノベーション論、311とガリレオ（とカムイ）から見る科学史					
授業の到達目標					
14、311は、ガリレオを中心とした、17世紀科学革命について、理解を深め、現代科学の民間性の根拠を探るための考察をする。					
授業の概要と計画					
1回目には まず、科学の歴史とは何か、そして大枠での「近代」について、近代社会を3つのキーとなる枠組み（政治と憲法決定、経済と生産、文化・宗教と科学）から、考える。 2回目には、近代について特に科学革命の意味を検討する。 次に3、4回目で、ガリレオが世界の歴史に持った意味を、3つの視点から概観する。 （これは第2・第4クォーターでの、『カムイ伝説』から、ヨーロッパのガリレオと、日本の「カムイ」を対比する巨視的な視点で、歴史を考察する。そしてイノベーション論の基礎、シュンペーターの「新結合」についてを論じることに繋がる。） 5・6回目は、さらに、山本義隆の著作に触れ、科学哲学的な考察を深め311という現際の現代的課題を、歴史的に考察し、7回目で、科学史を現代的な課題として、大きく構想するために、山本の最新刊も併せて読む。 8回目、「まとめ・試験」 なお、これは概観上、適度でオンデマンドを基本とするが、可能な限り、リアルタイムや、対面を入れて、いわゆるアクション・ラーニングやアクティブ・ラーニングと呼ばれるメソッドを試みて、教育効果を高めることを狙っていきたい。もちろんそのためには、感染の状況などに配慮する必要があり、また施設の使用状況との調整もいるので、適宜、状況に応じて、受講生には連絡をする予定であるので、注意をしておいてほしい。					
成績評価方法					
2回回のリーディングアサインメントについてのレポートと、試験。 かなり高い基準を適応する。 単純な足し算ではなく、掛け算（つまりひとつでもゼロなら全部ゼロ）と、正規分布などを組み合わせたシステムをとるので、単純な割合などは公表できない。					
成績評価基準					
科学革命におけるガリレオの役割、イノベーションの意味などを理解していること。 単純な足し算ではなく、掛け算（つまりひとつでもゼロなら全部ゼロ）と、正規分布などを組み合わせたシステムをとるので、単純な割合などは公表できないが、一応、例としては、A+Bの自乗をCをプラスしてそれにDをかけた点数のルートをとる2回取ったもので正規分布をとり、中央値から標準偏差内をR、上方に標準偏差を超えたものをAと評価する。					
履修上の注意（関連科目情報）					
この科目はグローバル人材を育成するために異文化や日本文化を理解する能力を培うグローバル共通科目です。 予習には毎回2〜3時間を要する。 基本的には読書量が少ないこと、新聞・雑誌・メディアアクセスジャーの扱いことは許されない。					
事前・事後学習					
ガリレオについて、および現代科学論についての体系的な読書を必要とする。 本学では1単位あたりの学習時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学習・事後学習を行ってください。 一応、これを書けと具体的に言われたので書いておくと、ガリレオについて20時間、近代について20時間、数学について5時間、としておきたい。					

オフィスアワー・連絡先	木・12:45-13:15、国際文化学研究所、E棟406
学生へのメッセージ	勉強は、すつこく、楽しい。 もしも貴君たちが、大学での多い人の取得に、「効率」ということを考えるなら、それは、それもいだろう。 この授業は、時間消費が少なくて単位が取れるような、そんな消費の良さはない。 だが、「本場の効率」ということを考えてほしい。大学に来て、本腰を入れて「学問」に向き合う機会を得ることができる。「知」の世界のすこやかに触れられる、としたら、それはキミたちの人生にとって、最高の「効率」を生み出す、物では得難い知的な財産となるのだけ、へへへ。
今年度の工夫	イノベーション論に触れ、ガリレオをキーワードに、日本科学史と311を考察するところ。
教科書	
科学の危機 / 倉森修・集英社、2015、ISBN:9784087287828	
参考書・参考資料等	
競争と農業 / 藤原辰史・集英社、2017、ISBN:9784797688157	
授業における使用言語	日本語だが、英語ができない場合、教養の基礎があるとは呼べないので、英語も、少なくとも、アメリカの大学一年生くらいには、聞めるようにはしてほしい。
キーワード	イノベーション論 イノベーション・モデル ポスト311のイノベーション スマートグリッド エコ技術 グローバル 311 カムイ プロメテウス 村上隆一郎 中山茂 山本義隆
なお、これは概観上、適度でオンデマンドを基本とするが、可能な限り、リアルタイムや、対面を入れて、いわゆるアクション・ラーニングやアクティブ・ラーニングと呼ばれるメソッドを試みて、教育効果を高めることを狙っていきたい。もちろんそのためには、感染の状況などに配慮する必要があり、また施設の使用状況との調整もいるので、適宜、状況に応じて、受講生には連絡をする予定であるので、注意をしておいてほしい。 単純な足し算ではなく、掛け算（つまりひとつでもゼロなら全部ゼロ）と、正規分布などを組み合わせたシステムをとるので、単純な割合などは公表できないが、一応、例としては、A+Bの自乗をCをプラスしてそれにDをかけた点数のルートをとる2回取ったもので正規分布をとり、中央値から標準偏差内をR、上方に標準偏差を超えたものをAと評価する。	

開講科目名	日本史A			
担当教員	山本 昭宏		開講区分	単位数
			第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	木2	時間割コード
				3U097
授業のテーマ テーマは「戦後日本の政治と文化」 高校までの歴史教科書では紙幅の都合から現代史の記述は限定的である。総じて、戦後日本の歴史や文化を教室で学ぶ機会は多くはないと言える。 例えば、新聞をめくれば自然と目にする「日米関係」や「日中関係」、「歴史認識」、「自民党」などの言葉は、戦後史を踏まえたほうがより正確に理解できるだろう。 本講義では、戦後史をいくつかの観点から振り返るが、そこで重視するのは「文化」と「政治」である。 政治の重要性は言うまでもないが、文化も同様におおきな力を持ってきた。日常生活で触れる過去の音楽や小説、映画などには、それが製作された時代精神が少なからず刻印されている。受講生は、戦後日本の歴史と文化を概観し、実際の資料や文化に触れることで、現代の諸問題や日常的に触れる文化を歴史的に考察する能力を身につけることができるだろう。				
授業の到達目標 現代日本を理解するうえで、その直近の過去である戦後日本の政治と文化を知っておくことは重要である。この授業では、戦後史の基本的理解、理解のための文献の調査法、資料へのアプローチ法の獲得を目指す。				
授業の概要と計画 戦後日本の政治と文化 1 1. イントロダクション 歴史と現在：戦後日本の政治と文化を学ぶ意義【オンデマンド】 2. 終戦後の混乱と価値の転倒 占領期①【オンデマンド】 3. 朝鮮戦争と「逆コース」占領期②【オンデマンド】 4. 大衆社会の文化と安保闘争 1950年代【オンデマンド】 5. 高度経済成長期の諸問題：開発・原発・万博 1960年代①【オンデマンド】 6. 「昭和元禄」と若者たちの異議申し立て運動 1960年代②【オンデマンド】 7. 授業の振り返りと質疑応答【Zoom】				
成績評価方法 成績評価は、授業後のコメント提出（第2～6回までの計5回で50%）と、学期末のレポート（50%）。レポート課題や、形式については、講義の中で説明する。				
成績評価基準 授業後のコメント提出（第2～6回までの計5回）については、授業の理解度を評価する。 学期末のレポートについては、問題意識と調査内容、情報の整理能力を評価する。				
履修上の注意（関連科目情報） 特になし				
事前・事後学修 事前学修は求めない。その代わりに、事後学修として、教科書指定した著作の該当部分を読むこと。読む頁については、授業で指定する。				
オフィスアワー・連絡先 連絡先は以下。 a.yanamoto@inst.kobe-cu.ac.jp				
学生へのメッセージ 現代の社会問題や政治や文化を理解するためには、歴史的なものの見方が必要だと考えます。 知的好奇心に満ちた生活を送るためにも、戦後史の基本的知識や、歴史的なものの見方を獲得していただければ幸いです。				

今年度の工夫	
教科書	
	戦後民主主義：現代日本を創った思想と文化 / 山本昭宏：中央公論新社，2021，ISBN:9784121026279
参考書・参考資料等	
	特になし。授業中に紹介する文献の他、小説や映画などから関心を持ったものを鑑賞してほしい。
授業における使用言語	
	日本語 日本語
キーワード	
	日本近現代史 戦後史 政治史 文化史 社会史 知識人 メディア（新聞、雑誌） 遠隔授業

第4章 授業振り返りアンケートにみる学生の意見

4.1 アンケートの内容と注目点（コロナ前とコロナ期の比較）

歴史と文化教育部会においては、他の部会と同様、毎年（毎期末ごと）に国際教養教育院が行なう授業振り返りアンケートで、各授業終了後の学生たちの意見を集約し、記録・保管してきている。今回は、新型コロナウイルスに伴う授業形態の変化（従来の対面授業から、オンライン授業への移行）が、学生たちの授業への取り組みや目標到達の自己評価、受講後の感想などにどのような影響を及ぼしたか否か、という点に特に注目しながら、令和1（2019）年1Q・2Q分と令和3（2021）年1Q・2Q分の二つの時期の資料を比較検討してみたい。令和元年（2019年）1Q・2Qは、新型コロナウイルス感染症がまだ現れず、当部会の授業が全て対面式で行なわれていた時期である。他方、令和3（2021）年1Q・2Qは、コロナ渦中で原則としてオンライン型の授業が行われてきた直近約2年間のうち、振り返りアンケートの結果が既に出揃っている最新の時期に当たる。両時期の設問と回答選択肢は全く同じで、次の通りである。

設問1. この授業に関して、平均して毎週どれくらい自己学修（予習、復習を含む）をしましたか。

回答選択肢 ①180分以上、②120分以上－180分未満、③60分以上－120分未満、④30分以上－60分未満、⑤0－30分未満。

設問2. この授業の内容はよく理解できましたか。

回答選択肢 ①そう思う、②どちらかといえばそう思う、③どちらともいえない、④どちらかといえばそう思わない、⑤そう思わない。

設問3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。

回答選択肢 ①十分に達成できた、②ある程度達成できた、③どちらともいえない、④あまり達成できなかった、⑤達成できなかった、⑥到達目標が分からない、⑦シラバスを読んでいない。

設問4. この授業で改善が必要と思われる事項があればチェックしてください（複数可）。

回答選択肢 ①担当教員の授業への熱意、②担当教員の学生に対する接し方、③担当教員の話し方、④板書、教材、ビデオ等、⑤シラバス、⑥授業の進み方・計画性、⑦特になし。

設問5. 総合的に判断して、この授業を5段階で評価してください。

回答選択肢 ①有益であった、②どちらかといえば有益であった、③どちらともいえない、④どちらかといえば有益ではなかった、⑤有益ではなかった。

4.2 アンケート結果の分析と2つの時期の比較

■令和元年度前期 授業振り返りアンケート結果		【設問1】この授業に関して、平均して毎週どれくらい自己学修(予習、復習を含む)をしましたか。 1. 180分以上、2. 120分以上-180分未満、3. 60分以上-120分未満、4. 30分以上-60分未満、5. 0-30分未満					【設問2】この授業の内容はよく理解できましたか。 1. そう思う、2. どちらかといえばそう思う、3. どちらともいえない、4. どちらかといえばそう思わない、5. そう思わない					【設問3】シラバスに書かれている到達目標をあなたはその程度達成できたと思いますか。 1. 十分に達成できた、2. ある程度達成できた、3. どちらともいえない、4. あまり達成できなかった、5. 達成できなかった、6. 到達目標が分からない、7. シラバスを読んでいない							【設問4】この授業で改善が必要と思われる事項があればチェックしてください(複数可)。 1. 担当教員の授業への熱意、2. 担当教員の学生に対する接し方、3. 担当教員の話し方、4. 板書、教材、ビデオ等、5. シラバス、6. 授業の進み方・計画性、7. 特になし							【設問5】総合的に判断して、この授業を5段階で評価してください。 1. 有益であった、2. どちらかといえば有益であった、3. どちらともいえない、4. どちらかといえば有益ではなかった、5. 有益ではなかった							
回答	回答	回答	回答	回答	総計	回答	回答	回答	回答	回答	総計	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	総計	回答	回答	回答	回答	回答	総計						
1	2	3	4	5	486	1	2	3	4	5	486	1	2	3	4	5	6	7	7	7	486	1	2	3	4	5	486						
12	13	38	91	332	486	119	200	96	34	37	486	78	187	102	38	13	14	54	486	20	25	40	70	19	33	279	486	168	175	99	19	25	486
2.5	2.7	7.8	18.7	68.3	100	24.5	41.2	19.8	7.0	7.6	100	16.0	38.5	21.0	7.8	2.7	2.9	11.1	100	4.1	5.1	8.2	14.4	3.9	6.8	57.4	100	34.6	36.0	20.4	3.9	5.1	100
■令和3年度前期 授業振り返りアンケート結果																																	
時間割	教育部会	回答	回答	回答	回答	回答	総計	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	総計	回答	回答	回答	回答	回答	総計						
1	2	3	4	5	404	1	2	3	4	5	404	1	2	3	4	5	6	7	7	7	404	1	2	3	4	5	404						
14	24	113	153	100	404	139	210	43	7	5	404	87	224	62	9	2	3	17	404	15	8	12	43	4	15	307	404	201	148	43	8	4	404
3.5	5.9	28.0	37.9	24.8	100	34.4	52.0	10.6	1.7	1.2	100	21.5	55.4	15.3	2.2	0.5	0.7	4.2	100	3.71	2.0	3.0	10.6	1.0	3.7	76.0	100	49.8	36.6	10.6	2.0	1.0	100

令和1年度前期は、1Qと2Qに開講された当部会の、延べ25の授業に対する回答を集計したものである。他方、令和3年度前期は、1Qと2Qに開講された当部会の延べ23の授業に対する回答を集計したものである。授業科目や教員ごとにアンケートの結果が様々であることは当然だが、部会全体としての傾向を把握するために、全授業への回答を合算した。回答した学生数は令和1年度が486名、令和3年度が404名であった。2カ年を隔てる両調査の間に、担当教員は若干異動があり、受講生(回答者)はほぼ全員入れ替わっているが、400名を超える両母数集団の、同じ設問に対する回答結果を比較することには一定の意味があるだろう。

設問1. この授業に関し、平均して毎週どれくらい自己学修(予習、復習を含む)をしましたか。
回答選択肢 ①180分以上、②120分以上-180分未満、③60分以上-120分未満、④30分以上-60分未満、⑤0-30分未満。

別表通り、令和1年度においては、最も短い⑤を選択した学生が68.3%を占め、ある程度(30分から2時間未満)の④、③を選択した学生も18.7%、7.8%であるなど全体に低調で、授業時間外にはあまり自己学修を行なっていなかった状況がうかがえる。

これに対し、令和3年度においては、最も短い⑤を選んだ学生は24.8%に激減している。他方で、ある程度(30分から2時間未満)の④、③を選択した学生は各々37.9%、28%と有意の伸びを見せている。さらに、2時間以上、3時間以上の②、①を選んだ学生も増えている。全体として自己学修を行なう学生が増え、その学修時間も伸びている傾向が明らかである。両時期にわたる2年間は、国際教養教育院や各部局において、「90分の授業につき、事前90分の予習、事後90分の復習を行なって初めて(それに授業時間数をかけ合わせて)1単位を構成する」という事柄をそれ以前に増して学生全体に周知するよう努めた時期であり、これがある程度の効果を挙げた可能性もある。同時に、オンライン授業という形態が(授業を受けるのが自宅であっても/自宅であるがゆえに却って)授業以外の時間にも机やパソコンに向かって自己学修することを促し習慣化させた可能性も考えられよう。

設問2. この授業の内容はよく理解できましたか。

回答選択肢 ①そう思う、②どちらかといえばそう思う、③どちらともいえない、④どちらかといえばそう思わない、⑤そう思わない。

令和1年度においては、①(そう思う)、②(どちらかといえばそう思う)の選択者は、それぞれ24.5%、41.2%であり、それ自体決して低い数字ではなかった。これに対し、令和3年度においては①34.4%、②52.0%と、いずれも約10ポイント増えている。対照的に、⑤(そう思わない)は令和元1年度の7.6%から令和3年度の1.2%へ、④(どちらかといえばそう思わない)は同じく7.0%から1.7%へと有意な減少をみせている。また、③(どちらともいえない)も、19.8%から10.6%へと半減している。総じて、コロナ禍でオンライン授業となった時期の方が、「授業が(よく)理解できた」と感じている学生の割合は増えていることが見てとれるであろう。

設問3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。

回答選択肢 ①十分に達成できた、②ある程度達成できた、③どちらともいえない、④あまり達成できなかった、⑤達成できなかった、⑥到達目標が分からない、⑦シラバスを読んでいない。

令和1年度においては、①(十分に達成できた)が16.0%、②(ある程度達成できた)が38.5%、合わせて54.5%であった。これに対し、令和3年度においては、①21.5%、②55.4%、合わせて76.9%と合算で22ポイント以上の伸びをみせている。令和1年度にはかろうじて半分強の学生が達成感を感じていたのに対し、令和3年度には四分の三強の学生が達成感を覚えていたことになる。対照的に、⑤(達成できなかった)は2.7%から僅か0.5%へ、④(あまり達成できなかった)は7.8%から2.2%へ減少している。授業目標の達成感においても、コロナ禍によるオンライン授業の方が良好な傾向にあることが読み取れるであろう。なお、従来一定数存在した⑦(シラバスを読んでいない)や⑥(到達目標が分からない)も、それぞれ11.1%から4.2%、2.9%から0.5%へと、有意な減少を示している。授業形態が対面からオンラインとなり、学修上パソコンに触れることが必須となったことに伴って、従来から電子情報として公開されていたシラバスや、その中に明記される授業目標をきちんと確認することが、以前よりも当たり前になったことを示す数字ではないだろうか。

設問4. この授業で改善が必要と思われる事項があればチェックしてください(複数可)。

回答選択肢 ①担当教員の授業への熱意、②担当教員の学生に対する接し方、③担当教員の話し方、④板書、教材、ビデオ等、⑤シラバス、⑥授業の進み方・計画性、⑦特になし。

7つの選択肢のうち①～⑥は、各々の項目に挙げられた点につき「何らかの問題がある」、従って「改善の必要がある」という、いわば「不満」の状況である。表をみて特徴的なことは、

令和1年度に比べ令和3年度の方が、①～⑥の数値が軒並み下がっている、ということである。特に③（担当教員の話し方）は8.2%から3.0%へ、④（板書、教材、ビデオ等）は14.4%から10.6%へ、⑤（シラバス）は3.9%から1.0%へ、⑥（授業の進み方・計画性）は6.8%から3.7%への減少で、有意の数値と判断される。対照的に、⑦の「特になし」は、57.4%から76.0%へ大幅に増えている。これをひとことで言えば、コロナ前（対面授業の時）には半分近くの学生が授業に対し何らかの不満を抱いていたのに対し、コロナ期（全面オンライン授業の状況下）では四分の三の学生が、教員の授業運営に対し特に不満はないと感じていることを示している。令和3年度はいわゆるコロナ禍も2年目で、前年令和2年度に初めてオンライン授業の要請に直目し苦勞したであろう多くの教員も、機器の操作などを含むオンライン授業の運営にかなり慣れてきたと思われる時期である。その評価を問う学生アンケートで、とりわけ②学生に対する接し方や、③担当教員の話し方、④板書・教材・ビデオ等、⑥授業の進み方・計画性などの項目における不満が、対面授業の時期より減少している（逆にいうと満足度が上昇している）ことは、おおいに注目すべきと思われる。

設問5. 総合的に判断して、この授業を5段階で評価してください。

回答選択肢 ①有益であった、②どちらかといえば有益であった、③どちらともいえない、④どちらかといえば有益ではなかった、⑤有益ではなかった。

①（有益であった）が令和1年度においては34.6%だったのに対し、令和3年度には49.8%へと15ポイント以上の増加をみせている。②（どちらかといえば有益であった）は36.0%から36.6%の微増だが、①と②すなわち肯定的な評価を合算すれば、コロナ前の70.6%がコロナ期には86.4%へと大幅に増えている。これに対し、⑤（有益ではなかった）、④（どちらかといえば有益ではなかった）は令和1年度の5.1%、3.9%から令和3年度の1.0%、2.0%へといずれも有意な減少をみせており、否定的評価を合算した数値も9.0%から3.0%へと三分の一に減っている。令和1年度に20.4%であった③（どちらともいえない）の回答は、令和3年度には10.6%へと半減している。全体としていえば、令和1年度（コロナ前）に比べ令和3年度（コロナ期）の方が、「授業が有益であった」と考える学生の割合は増加していると要約できる。

以上、設問1～5にわたるアンケート結果を総括すれば（当教育部会の提供授業に限って言えば）、令和1年度（コロナ前）に比べ令和3年度（コロナ期）の方が、(1)学生は授業外でもより長時間自己学修した；(2)授業の内容をよりよく理解した；(3)シラバスの到達目標を達成できたと感じている学生が増加した；(4)教員の授業運営に対する学生の満足度も上昇した；(5)授業が有益であったと感じている学生が増えた、ということになる。

4.3 自由記述の抜粋

毎期のアンケートでは自由記述欄も設けている。記入する者もいれば（複数可）、何も記入しない者もいるので、統計的な分析にはそぐわないが、これについても令和1年度（コロナ前）と令和3年度（コロナ期）それぞれについて、肯定的な評価／不満や提言などに区分し、代表的な意見を参考までにとりあげ、順不同で列挙しておく。

令和1（2019）年度1Q・2Q

肯定的な評価

- ・考古学を身近に感じることができました。楽しかったです。ありがとうございました。
- ・自分の地元に関する話題が多々出てきてとても面白かったです。
- ・BEEFにプリントを上げてくださるので、とても助かりました。事情があり休まなければいけない時があったのですが、その際に活用させてもらいました。（以上3つ、考古学B）
- ・イスラム世界に特化して授業が進んで、詳細まで詳しく勉強できたのはとても有意義でした。専門分野ではない科目で、ここまでしてくださってとてもよかったです。（東洋史B）。
- ・授業の内容は面白かったし、日本史を受験で使用したので理解も容易だった。（日本史A）。
- ・古典や地図等の資料を使って、5、6世紀をどう捉えるかということについて詳細にわかりやすく講義されていて、非常に興味を持てた。また、様々な見解も合わせて紹介されたことで、自分自身でもどう捉えることができるのか考察することができた。（日本史A）。
- ・日本史の新たな見方を色々と知ることができてよかったです。（日本史B）。
- ・黒人差別撤廃の流れに政治や世界情勢が影響しているということが興味深かった。
- ・ビデオなども交えた講義で分かりやすかったです。先生の話し方も聞きやすかったです。（以上2つ、西洋史A）
- ・多くの音楽に触れることができ非常に有意義な経験となりました。
- ・普段自らヨーロッパの音楽を聴く機会は無かったので、この授業を受けて良かった。音楽を聴いて何かを考えるとということを経験したので、これからもそれを意識していきたい。（以上3つ、芸術史B）
- ・自分が元々音楽に精通しているという背景はありますが、内容もとても興味深く、近隣の生徒との小さなディスカッションがあるという授業の進め方もよかったと思われまます。
- ・左右と意見を交換し合うのがとてもためになりました。（以上2つ、芸術史A）
- ・面白かった。科学史Aも受けたいと思いました。（科学史B）。
- ・説明においてよく具体例を挙げてくださるのでわかりやすかったです。
- ・先生がおすすめの本を紹介してくれるのが、良かった。アジア史Aも予定が合えば、またとりたいたいと考えている（以上2つ、アジア史A）。
- ・高校の日本史や世界史の枠組みを超えた授業だったので、聞いていて面白かったです。

・世界史が大好きなので取ってよかったと思いました！（以上2つ、アジア史B）

不満、提言など

・とても身になるうえ、熱心に講義をしてくださり、とても面白い授業でした。ただ、一部学生に、毎回授業に遅れてくる、授業に遅れておいて前の席で突っ伏して眠るといった、真面目に講義を受ける周りに不快感を与える人が見受けられました。一定時間を過ぎたり、遅延などの理由なしに遅れたりした生徒は講義に途中から参加させないといった対策はないのでしょうか。周りの生徒だけでなく、教授に対して大変失礼だと思います。

・もう少し、出席の評価を厳しくしてくださるとありがたいです。授業中に堂々と遅刻する方が多く授業に集中できないことが多かったのです。（以上2つ、考古学B）

・地図に地名を振った上で表示するかプリントとして配って欲しいです。世界史も地理もろくに習っていないので、地名や時代背景がちんぷんかんぷんで追いつくのが大変でした。

（東洋史B）

・レジュメに書き込むためのスペースがほしかった。（日本史A）。

・BEEFを積極的に活用してほしい。（西洋史A）

・授業内容は面白かったのですが、シラバスを無視しすぎだ、というのが率直な感想です。講義でシラバス通りでは面白くないと仰っていましたが、あくまで教養科目なので、学生はシラバスを見て授業を選ぶと思います。（芸術史B）。

・テストの時に終わる時刻を黒板に記載して欲しいです。終わる3分前に言われても厳しいです。せめて5分前に告知してください。（芸術史A）。

・レジュメの順番が前後してわかりにくいことがありました。（日本史B）。

・beefを積極的に活用してほしい。（西洋史B）

・板書を取れとしつこく言う割に、板書の書き方が煩雑で読み辛く、また、往々にして直ぐに消されてしまうために間に合わない事があった。そんなに板書が重要なら、もう少し気を使っただけだと講義を受ける側としてはありがたい。（アジア史B）。

・基本的に何を言ってるかわからない。板書の字が読みづらい。また授業の進め方に計画性のなさを感じた。（西洋史B）

令和3(2021)年度1Q・2Q

肯定的な評価

・身近だけどこれまで授業等であまり触れられて来なかった、アジアや華僑・華人の歴史に興味があったので、履修してよかったと思っています。先生ご自身の体験談や写真もあってわかりやすかったです。（アジア史A）。

・日本史は小学や中学で学習したことがありましたが、大学での日本史はさらに詳細に学ぶのだということがわかっただけでも良い機会でした。大学という教育機関において、日本史でどのようなことを学んでいるのかということは疑問に思っていましたし、その研究内容に興味があったので、充実した授業であったと感じます。（日本史 A）。

・高校までの世界史とは違って、史料をもとにした分析が自分にとって新鮮だった。研究がどのように行われているか知ることができたし、より深い知識を得ることができたと思う。

・評価基準が毎回説明されて、自分がキャッチできなかった内容がわかってきてよかった。出題意図を考えながら解答を書けるようになった。地図や写真が多く提示されていたので理解しやすかったと思う。（以上 2 つ、西洋史 A）。

・考古学に興味を持つきっかけとなった。

・図が豊富に用いられていて視覚的に理解しやすかったし、何よりも楽しく授業を聞くことができた。項目ごとに線が色分けされていた点も良かったと思う。やや文字が細かくて情報量が多いと感じたことはあるが、今後より深く考古学を勉強したいと感じた場合に、それらの細かい情報も役立つのだろうと考えた。

・図をふんだんに配置した構成のスライドは、具体的なイメージがしやすく理解に大いに役立ったように思います。（以上 3 つ、考古学 A）

・リンクの共有だけでなく、実際に音楽をその場で聞かせてもらえるのがとてもよかった。その場で聴いて考えたすぐ後に、先生の解説を聞けると頭に入ってきてやすかったです。

・授業のテーマとなる音楽を共有してくださったり、見やすい資料を作ってくださっていたのでとても受けやすかったです。

・他の受講生とのディスカッションを通して、他の人がどう考えているのかということを知り、様々な観点から一つの問題について考えることができた。（以上 3 つ、芸術史 A）

・音楽史という今まで習ったことがないようなことを学べたので良かったです。（芸術史 B）。

・受験で用いた日本史とは別の視点から学ぶことが出来、近現代史の見方が変わった。

・オンラインでの授業では、課題をその授業中に出せたので効率よく勉強できました。

・対面にはならなかったものの、毎回先生に学生のコメントを読んでリアクションをもらったので、双方向的に参加していることが感じられてよかった。（以上 3 つ、日本史 B 教員①）

・中高生に習った歴史は広くまんべんなくといった感じだったが一部の歴史にこれだけ細かく学ぶ事ならではの面白さを感じられたと思う。

・先生の知識が詳しくて東南アジアの歴史の知識もう深くて感動させた。

（以上 2 つ、アジア史 B 教員①）

・日本史の講義ということだったが、日本史上の資料を用いて、全体としては世界全体を含めた歴史学についての講義であるように感じた。歴史は単なる観察の対象ではなく、今の自分にも影響を与える可能性を秘めているということは、これからの学習でも必要な考え方で、法学を修めるうえでも、歴史がどのような役割をもって法体系を作り上げ得るのかを考察したいと思った。

・「もののけ姫」など、現代の映画や小説が取り上げられることもあったため、面白かったです。歴史を勉強するということが、単に起こった出来事や年号を覚えるだけではないということが分かりました。（以上2つ、日本史B教員②）

・大変良い講義なのに履修者が少ない。近代アジアにおける日本の歩みは周辺諸外国を見渡して得られることが多い。基礎教養科目なのだから、人生を豊かに生きる教養として、ぜひたくさんの人に学んで欲しい。（アジア史B教員②）。

・毎回決まったテーマで、ヴェネツィア人を中心に、中世地中海の交流を知ることができて面白かったです。高校で習った世界史のなかで、一部地域に的を絞って人々にフォーカスしたことはなかったので、このような風に世界史をとらえるのも面白いと思ったので、もっと同時代の他都市国家、また他地域の動向を知りたいと思いました。私としては、レジュメの配信や録画講義よりも、リアルタイム型オンライン講義や対面講義の方が身が入るので、できるならリアルタイムで授業を受けてみたかったです。

・分かりやすいレジュメで、西洋史に関する知識があまりない私でも理解することができたので良かったです。

・私たちのレポートに毎回フィードバックを書いて下さったので学習内容の深い理解に繋がりました。（以上3つ、西洋史A）

・とても面白かったし、先生が優しくて、この授業が大好きでした！ありがとうございました。（西洋史B教員①）。

・今までソ連の歴史について詳しく学んだことがなかったので、この講義がソ連史を学ぶよい機会になりました。ありがとうございました。

・ソ連の文化（特に赤軍の軍歌）に以前から興味があったためこの授業を履修した。ソ連史についての知識が乏しい人にとっても分かりやすく、かつ誕生から滅亡までの歴史の要点を欠かすことなく授業を進めていたため、これからソ連史の学びを深めていきたいと思っている人には良い授業だったと思う。（以上2つ、西洋史B教員②）

・毎週の授業で考古学の基礎を学び、それを最終課題で実際のことについて応用できたのがよかったと思う。

・史学を専修したいと考えていますが、史学に取り組むために必要な史料がどのように集められているかやどのように考えられてデータが導かれているのかがわかってよかったです。

・授業で触れる内容について、スライドで詳しく書いてくださっていたのでわかりやすかったです。色づかいもちょうどよく、とてもみやすかったです。（以上3つ、考古学B）

・音楽史というのは今まで学んだことはなかったが、音楽好きの私にとっては、とても興味深い内容の講義が多く、面白かった。（芸術史A）。

・台湾という日本から最も近い地域の一つで九州ほどの面積の島に、原住民が原住民として住んでいることをほとんど知らなかったことを恥ずかしく思った。日本でも沖縄やアイヌの人々が迫害されてきた歴史があるが、憲法にすら書かれている現代台湾のような原住民を差別してはいけないという意識が共有されているとは思えない。

・今まで特に意識していなかった問題でありましたが、過去の事象などから順に追って授業を受けるにつれ現在の問題まで理解することができました。（以上2つ、東洋史A）。

不満、提言など

・フィードバックは一律の点数ではなく、課題をしっかりと評価したうえでの点数をつけていただけると良かった。（西洋史A）。

・ブレイクアウトルームはもう少し、話しやすい雰囲気が欲しかった。

・授業自体を録画するのは構わないが、チャットなどで名前が残ってしまうのが少し嫌だったため、録画した動画の公開に期限を設けてほしいと思った。（以上2つ、芸術史A）。

・内容はとても良かったと思います。少人数での授業だったので、個人で発言したりブレイクアウトルームで話し合ったりする時間があっても良いと思いました。（アジア史A 教員①）。

・授業の進み具合の影響でシラバスの計画通りに授業が行なえなかったということは承知しているが、シラバスで触れられていた、後半の二条河原の落書や武士についての講義が気になって履修したため少し残念だった。（日本史B 教員②）。

・授業内容がもともと自分の興味があったことだということもあり、楽しかったです。ただ、文章だけから理解するのが少し難しかったので、解説動画等があったらもっといいなという風に感じました。少しの間ですが、ありがとうございました。

・新型コロナウイルス対策のためとはいえ、授業内容が資料を読んで、レポートを書くだけというのはどうしても味気ないものでした。（以上2つ、西洋史A）

・音声の倍速再生機能が欲しかったです（西洋史B、教員②）

・画像が多く視覚的に分かりやすいことは非常に助かりましたが、一方で理解できなかった時に文字資料を読み込んで理解することが難しいことがあったので、少し文字の量を増やして頂きたいと思いました。（考古学B）

・ブレイクアウトルームに飛ばす前にやることをチャットで送っておいて欲しい。わすれてしまう。（芸術史A）。

（自由記述の抜粋、以上）

第5章 「外部評価の評価項目モデル」に沿った自己点検・評価

歴史と文化教育部会では、他の教育部会と同様、毎年、自己点検・評価報告書を作成している。最後にそれらを参照しつつ、各項目について、自己評価を行っていきたい。これは大学機関別認証評価の「大学評価基準」をもとに、国際教養教育院の各教育部会が毎年度自己点検・評価を実施し、報告書を作成する際に活用している「自己点検・評価及び外部評価の評価項目モデル(平成30(2018)年6月14日評価・FD専門委員会改訂)」に対応したものである。

5.1 授業科目の共通目標

歴史と文化は学問領域を共有する集団として、設定当初より教育目標を潜在的に共有してきた。昨年度半ばにそれは明文化されたが、その内容は、教育憲章にも教養教育の目的にも沿ったものである。

5.2 組織構成と運営体制

歴史と文化教育部会は3部局(人文、国際文化、人間発達環境)22名の教員からなり、歴史に関係する幅広い分野を覆っている。ただし、法制史、経済史など、すでに学界では学問的交流のある関連分野の教員の参加が見られず、いまだ充実の可能性が残されている組織構成でもある。混迷を続ける現代世界において、歴史に問いかける姿勢は大事であり、非常勤削減や定年・異動に伴う人数の減少を食い止めるため、部会の努力のみならず大学全体のバック・アップが必要である。歴史と文化教育部会は、折に触れて、本教育部会の授業を真の専門家として担当できる教員人事を要望してきたが、今後もその努力を続けていく必要があろう。

歴史と文化教育部会は、原則として年1回は部会会議を開催しており、またメールを活用することによって緊密な情報交換と意思疎通を図っている。部会長の選出においても、3部局による持ち回りと幹事を通じた協力体制が打ち立てられており、概ね本部会が行う教育が直面する課題に対する理解と、問題意識の共有を図る体制が構築されている。

5.3 教育課程と学習成果

歴史と文化教育部会の授業内容は、シラバスからも明らかなように、バラエティに富んでおり、対象とする時期や地域も多様で、教員数相応に歴史を学ぶメニューを幅広く受講生に提供できている。また各教員は最新の研究成果に基づいて授業を行っており、高校までの歴史と大学の歴

史研究の違いが、シラバスを通してよくわかる編成になっている。

以上のような教育課程は、「教養原論」の教育課程編成上における位置付けと意義に沿うものであり、当教育部会が提供する科目は、そのなかで十分な役割を果たしていると言える。

なお平成30(2018)年度の自己点検評価報告書によると、「歴史と文化部会の提供授業は、全体としてバランスの良い多様な科目を提供しており、また授業振り返りアンケートによる理解度・総合評価も全て3.5以上、平均として4近くの出来である。ともすれば「歴史」は「背景知識を十分に説明しようと詰め込みすぎになる傾向」があるが、学生の回答を見ていると、そうした傾向を自重しつつ内容を絞って提供することの重要性を教員側が再確認し工夫していることが徐々に浸透してきている」とある。

令和2年度に始まる新型コロナウイルス感染防止のための遠隔授業の導入は、当初こそ、教員と学生双方に少なからぬ混乱をもたらしたものの、そこで生まれた様々な創意工夫が新しい授業形態の可能性を広げている。令和2(2020)年度と令和3(2021)年度の授業振り返りアンケートの結果からは、(1)学生は授業外でもより長時間自己学修した；(2)授業の内容をよりよく理解した；(3)シラバスの到達目標を達成できたと感じている学生が増加した；(4)教員の授業運営に対する学生の満足度も上昇した；(5)授業が有益であったと感じている学生が増えた、という結果が得られている。だが、他方で新たな問題点や課題も浮上している。令和2(2020)年度の自己点検評価報告書の以下の指摘は、令和3年度を通じても学習成果に関する課題として残った。

「本部会で授業を担当した教員のほとんどが、「遠隔型授業」において、リアルタイム型を中心に、そこにオンデマンド型、あるいは一部対面型を加えるという授業形態を選択していた。その際、これまで授業前後の時間やオフィスタイムを使った質疑応答を、LMS・BEEFのチャット・小テスト・フォーラム・アンケートといった機能によって代替する中で、多少の混乱が生まれ、成績評価がどうしても高めに振れてしまうことが避けられなかった。「遠隔型授業」が常態化する中で、それらを、これまでの対面型授業とどう効果的にクロスさせるか；学生に対するフィードバックを授業の中で如何に的確に行うか；公正かつ適正な成績評価をどのように担保するか、といった諸問題を改善してゆくことが今後の課題である。」

5.4 施設・設備・学生支援

学生の自習環境については、共通教育部門において個別ブースを備えた自主学習室が整備されているほか、人文・国際文化・人間発達環境の各研究科において、ラーニングcommonsやグループ学習室が整備され、遠隔授業に対応した機器の整備も急ピッチで進んでおり、ハード面での自主的学習環境は充実傾向にある。シラバスにはオフィス・アワーが記されており、メール照会にも回答が行われている。教職員の相互の努力によって配慮学生の就学上の困難を解決するノウハウも蓄積されつつある。

5.5 内部質保証

当部会では、他の部会と同じく、毎年の自己点検・評価報告書を作成して授業の振り返りに努めている。また平成 28 (2016) 年には外部評価委員会を開催し、積極的な意見交換が行われた。部会会議では内部質保証のための、教育上の問題・改善策の共有が進められている。

最も重要な課題は、「遠隔型授業」のより適切かつ効果的な運用を確立することである。「遠隔型授業」が、教員の講義形態の創意工夫を誘発し、受講者の学びの意欲を触発してゆく様は、この間行われた授業振り返りアンケートの結果に顕著に示された通りである。

「遠隔型授業」のより適切かつ効果的な運用を確立するに当たっては、高等学校の学習指導要領に示された歴史教育の新たな目標、すなわち、史資料・図象・映像などを駆使した歴史的事象の総合的な理解と学修という目標を、大学の共通教育において、どのように継承・発展させてゆくかという課題を、併せて考えてゆく必要がある。「遠隔型授業」にさまざまな工夫を加え、映像や音声を組み合わせた多様な教材を学生に提供する中で、対面型授業とのさらなる相乗効果を期待できるような授業形態を、歴史と文化教育部会として探求してゆかねばならない。「歴史と文化」教育部会の構成員が3つの研究科に跨ることは、意思疎通の面で若干の困難をもたらしているが、歴史学におけるディシプリンやアプローチの相違が、「遠隔型授業」のより多様な効果的な実施運営といった問題を処理する上で、かえって強みに働く可能性を秘めているのである。

第6章 1巡目の外部評価結果を受けた自己点検・評価

6.1 1巡目の外部評価結果及びそこで明らかとなった本部会の課題

今回の「歴史と文化」教育部会の外部評価は、平成28（2016）年1月6日開催の1巡目の外部評価委員会から6年を経過してなされるものである。

1巡目の外部評価は本部会の授業の試みに対して、極めて高い評価を与えた。

評価委員A：「高校の授業とは異なる具体的な問題への多面的なアプローチや、学生に意外感を持たせる人文現象の解釈の面白さ」が追求され、「研究の最先端部分を披露しながら、歴史文化研究とその成果を学ぶことの意義の説明が一定程度（学生に）受容され」ている。

評価委員B：「最新の研究を踏まえながらもそれを一方的な講義にとどめず、資料を活用し対話型や書く訓練を含めた授業をおこなう努力などが、系統的におこなわれている。」「アンケート結果から見ても、多様な科目を提供し魅力ある授業をおこなう努力が、履修者に伝わっていることが見て取れる。」

評価委員C：「個々の科目のシラバスをみても、概説的・基礎的な部分があっさりおさえつつ、現代的な関心や文化的な広がりと同時にカバーするというポリシーが全ての科目に貫かれており、各メンバーが基本理念を共有しつつ、それを各自の分野の状況に即したやり方で現実の形にしている」。「学生のアンケートからは、スタッフのそうした思いを学生もまた受け止め、それが着実に教育の成果につながっている状況を見てとることができる。これならば人文学とは縁のない、他の領域の学生に対しても歴史学のおもしろさを伝えることができる。」

ここに見られるように、1巡目での外部評価は、歴史一般の研究が科学史や芸術史などの研究と同居する「歴史と文化」教育部会の試みにおいて、狭義の歴史研究から、歴史意識や歴史の表象、記憶といった問題系を研究対象としてゆく志向を持つ点が高い評価を得た。

しかし、重要な課題も指摘された。「歴史学」というアイデンティティを軸にした本部会のまとまりの良さがかえって災いし、自らの外にある文化研究的な要素を取り込む機会を逸するのではないかという懸念が表明されたのである。

定型化された歴史知識を習得した集団としての新入生という想定は、高校教育が多様化した現在、もはや存在しない。そうした現状において、入学までの学生の学習範囲・知識などのばらつきを勘案しながら、どのようなバックグラウンドを持った学生にも対応可能な方法論に基づく、人文学・歴史学の導入的授業（「歴史学入門」）を設ける必要があるのではないか、という指摘がなされた。

さらに、歴史学に関して学生の多様なニーズに応え、実証的な歴史学がより学際的な領域の研究と対話できるようなプラットフォームを持った授業作りを進めてゆくことが重要である、とも強調された。

以上の2点が、1巡目の外部評価によって明らかとなった本部会の課題である。

6.2 課題に対する本部会の取組・改善への自己点検・評価

6.1に挙げた2つの課題に対する、本部会の取組・改善については、1巡目の外部評価がなされた直後の平成28（2016）年4月以後、教養原論を「総合教養科目」へと編成変えする際、「歴史と現代」という科目を廃止し、新たに「東洋史」、「美術史」という科目を新設して、既存の「アジア史」、「芸術史」の授業内容をより多面的に展開するカリキュラムの改編を行ったことが挙げられるだろう。

東アジアを中心に扱ってきた、それまでの「アジア史」に対して、「東洋史」はユーラシア地域史を念頭に、中東・アフリカまでを含めた歴史を議論している。また、文化史研究の色彩が強い「芸術史」に対して、「美術史」は西洋や日本の歴史事象に即した美術の流れを取り上げて論ずる。こうした新設科目の設置は、外部評価委員が課題に挙げた狭義の歴史研究の裾野を広げるべきだという提言に対応したものであった。しかし反面、履修する学生からは、「アジア史」と「東洋史」、「芸術史」と「美術史」について、それぞれの講義内容の相違が分かり辛いという指摘がなされてきたことも事実であり、外部評価委員が期待した、歴史教育の裾野を学際的な領域へと広げること成功したとは言い難い。

1巡目の外部評価で強く望まれた、歴史学の導入的授業（「歴史学入門」）の設置について言えば、過去6年間、個々の教員がそれぞれの授業の中で創意工夫した導入演習を試みることはあっても、それら教員の個々の試みを部会として情報共有し、新しい科目を立ち上げることに繋げることはできなかった。

歴史学の導入的授業の立ち上げと、既存の歴史学の裾野をさらに広げてゆくような授業作りが、依然として「歴史と文化」教育部会の改善すべき課題として残されている点につき、部会構成員および関係者は今後とも認識を共有してゆく必要があるだろう。

第Ⅱ部 外部評価

目次

第 1 章	外部評価委員会記録	47
第 2 章	外部評価委員による「外部評価委員報告書」	64
第 3 章	外部評価結果を受けての、本部会の今後の課題	68

第1章 外部評価委員会記録

「歴史と文化」教育部会 外部評価委員会

日時：令和4年1月5日

於：国際人間科学部鶴甲第一キャンパスE棟大会議室

出席者

外部評価委員：

甲南大学・中町信孝教授

同志社大学・竹内理樺准教授

神戸大学：

大月一弘（大学教育推進機構国際教養教育院長）

緒形康（部会長、人文学研究科）

貞好康志（幹事、国際文化学研究科）

平芳裕子（幹事、人間発達環境学研究科）

伊藤隆郎（人文学研究科）

長志珠絵（国際文化学研究科）

小澤卓也（国際文化学研究科）

高田京比子（人文学研究科）

開会 午後1時

●開会の辞

貞好幹事：年始早々大変ご多忙な中、この会のためにご参集くださいますとありがとうございます。神戸大学では全学共通教育、昔の教養教育の流れを引く全学共通教育を国際教養教育院で行っております。その中にある一つの分野、部会と呼んでおりますが、歴史と文化教育部会という組織の教育活動の外部評価委員会が本日の会でございます。部会長はこちらの緒形先生、私は部会長を補佐する幹事の一人で、貞好と申します。本日は司会を務めさせていただきます

ます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

今日の議事次第を口頭で申し上げます。1時開始で2時間、3時までを予定しております。まず冒頭、大月委員長から一言ご挨拶をいただきまして、それから2時間を3つの部に分けます。第1部、最初の25分で部会長緒形よりお手元に配りました自己評価・自己点検評価報告書をもとにしながら、概要の報告をご説明いたします。次に第2部は、外部評価委員のお二人の先生から20分ずつ忌憚ないご質問やご指摘、評価、コメントなどを、まず中町先生、ついで竹内先生からいただきます。そして5分ほど休憩したあとで、最後の第3部、総合討論につき、この場にいるどなたからでも、部会長の説明や外部評価委員のお二人のご指摘をふまえてどのようなことでもざっくばらんに忌憚なく、この教育部会、ひいては大学教育の改善のためにどんなお話でもよいですから、総合討論をする時間を45分予定しております。そして17時で閉会となりますことを予め申し述べておきます。それでは早速、大月国際教養教育院長から一言、ご挨拶をいただきたいと思ひます。

大月院長：大月でございます。今日は年明け早々お集まりいただきましてどうもありがとうございます。国際教養教育院は神戸大学の共通教育を行っているところです。これは約800人の専任の教員が授業を担当しております。それに加えて非常勤の先生方に大学の共通教育、いわゆる教養教育部分を担当していただいております。人数が多い関係もありまして、専門の方々に教育部会という形で集まっていただいて、その部会ごとに授業の計画、改善等に努めていただくという形をとっております。数年に一度程度、各部会ごとにこの外部評価を行なっておりますが、今年度は歴史と文化の教育部会の外部評価を行っていただいているところであります。担当の先生方、それから外部評価の先生方からご意見をいただきながら、新しく今後の大学の共通教育の授業を改善して役立てていきたいと思ひますので、本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

貞好幹事：大月委員長どうもありがとうございます。それでは第1部に入ります。緒形部会長から、お手元の自己点検・評価報告書をもとに、ご報告をお願いいたします。

緒形部会長：部会長の緒形です。本日はお忙しい中、中町先生、竹内先生、遠路お越し下さり、ありがとうございます。それから大月委員長におかれましても大変ご多忙のなかご出席いただきまして感謝申し上げます。報告書をまとめましたので、お話させていただきます。

●第1部：自己点検評価報告

緒形部会長より資料を用いて自己点検評価報告があった。

●第2部：外部評価委員による講評

貞好幹事：30分にわたる緒形部会長からの説明に対して、おそらくみなさんの中には多々質問や疑問点が生じた方も少なからずおられると存じますが、質問はすべて第3部の総合討論の際にお願いしたいと思います。まずは休みなしで、第2部に入りたいと思います。

最初に、お一人目の中町先生についてプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。中町先生は2004年に東京大学人文社会系研究科アジア文化研究の博士課程を単位取得満期退学されたあと、カイロ大学の聴講生やシカゴ大学の客員研究者、さらに早稲田大学のアジア研究機構を経て、2008年に甲南大学文学部歴史文化学科に准教授として着任され、2015年からは同じく甲南大学文学部の歴史文化学科教授を務めていらっしゃいます。専門分野はアラブ中世史、エジプト中世史、マムルーク朝史、アラビア語文献・写本学、ポピュラー音楽などと伺っております。それではいまから20分弱を目安に、ご講評をいただきたいと思います。

中町外部評価委員：ご紹介にあずかりました中町です。よろしく願いいたします。今回このような場にお呼び下さりまして、ありがとうございます。さまざまな大学で教養教育に対しては取り組み方が異なっているということがあると思いますが、神戸大学ではこのような外部評価の場を設けていること一つ取ってみても、手厚く教養教育に取り組まれているということを非常に実感しました。今日私がコメントいたしますことは、なにかお役にたてるのかは心許ないものの、私の方でも非常に得るものが大きく、本務校の方へ持ち帰り活かせるような事例がたくさん見つかりましたので、お役に立てれば幸いです。コメントというよりも質問のような形になりますが、五点ほど質問させていただきたいと思います。なかには素朴な質問に属するものもありますが、ご容赦いただけましたらと思います。

まず科目名について16頁以降一覧表がありますが、たとえば東洋史とアジア史が分かれている、また美術史と芸術史が分かれている、この分かれ目が外部の者としては理解しにくいところがありました。なにか成立上の事情があるのかという気もするのですが、初見ではわかりにくいという気がしますし、おそらくは学生さんも迷ってしまうのではないかという印象を受けます。もし可能でしたら、どのような基準や経緯で東洋史とアジア史、美術史と芸術史が分かれているのかをお聞かせ願えればと思います。

学生が迷うと申しましたが、シラバスをしっかりと見れば実際の授業の中身はわかるように当然なっていますけれども、21頁目からのシラバスの実例をいくつか目を通させていただきましたところ、初めの項目に授業のテーマとあります。その欄の使い方について教員の先生方によって様々なように感じました。というのは一つサブタイトル的なものをフレーズで挙げている方と、授業の簡略な内容、概要を文章であげていらっしゃる方が混在しているように見受けられます。21頁と次の頁でしたらフレーズで書かれていますが、24頁の方は授業のテーマとして2行にわたる文章を書かれています。そのあたり、学生が迷ってしまうことにはないかと思いました。フレーズであれ文章であれ、テーマには違いないのですけれども、授業名が東洋史や美術史などシンプルに統一されているので、たとえば授業のサブタイトルをフレーズとして統一してのせる、授業の概要は概要で長めに24頁の方のように書く、と統一があったほうが学生には選びやすいのではないかと感じました。これは教養教育の本質に関わる問題で

はないと思いますが、そのようなことを疑問に思った次第です。

それから、17頁から履修状況として授業の履修者数一覧が挙げられています。拝見すると、月・火1限、木2限が科目に当てられた時限として固定されているかと思いますが、月1限は全体的に多い。理系の学生さんが取られているという説明があったので、それが影響しているのでしょうか、逆に木2限は非常に少ないですね。月1限は1Qで301名の延べ履修者がいますが、火1限では97名、木2限は56名と減っている。すべてを見てはいないんですが、火2限などはクォーターによっては違う日もあるんですね。偏りを是正するというのが今後の課題、工夫として必要だとおっしゃいましたが、これは私の勤務先でも同じような現象が起こっております。特に200名、300名の大人数の履修者が特定の教養科目に学部を超えて集中してしまう現象はうちでも見られます。こちらではどのように解決する手段をお考えなのかを伺いたいと思います。たとえば甲南でしたら、規模として小さいのであまり比較にはならないかもしれませんが、履修制限をします。くじ引きであったり先着であったりします。150人というラインを引いて、それより多いものは避けるべきと。150人以内ならくじ引きに入る、先着制ですね。そのようなことをしています。また教養教育にあてられた時間も週に10時限くらいの幅があり、なるべく特定の時限に集中しないということをやっています。ただあまり増やしてしまうと各学部の専門教育に差し障るのであまり良い手立てではないとは思いますが、こちらの事例をお伝えしたうえで、どのような手段で偏りを是正するのかお考えなのか伺いたいと思います。

以上、3つほど申し上げましたが、もう少しあります。やはりこの3年間でコロナ前と後を大学教育は経験していて、教育に携わる者みなが直面してきた大きな問題だったと思います。この授業アンケートを拝見して、シラバスを読む学生が増えているとか、そもそも授業に対する理解度満足度が軒並み上がっているという結果を見て、正直驚きを感じるとともに、そういう側面もあろうかという納得と両方の感想を持ちました。確かにオンライン講義、オンデマンドであれリアルタイムであれ、学生と教員双方のデジタルリテラシーが向上していますので、そのような意味で学生のスキルも上がっている、教員側のスキルも上がっていると思いますので、そういうところがマッチして理解度が向上した、このアンケート結果にありますような、自己学習時間が増えたとか、よく理解できたという数値が上がっているのは、考えてみれば当然の結果のように思います。

しかし一方で、アンケートの答えでそれほど多くはなくて1例だけ見たのですが、そもそも私は対面の授業の方が学習に身が入るたちなので、オンデマンドであることが残念でした、という感想を述べている学生さんがいらっしゃる。37頁の3段落目の学生さんですね。リアルタイムのオンラインや対面講義の方が、身が入るといって人が1例だけあります。確かにこう考える学生も、また教員の側でもやはり対面をのぞむ声、私自身も実感としてもありますので、想像ができることです。来年度以降の授業形態がオンラインなのか対面なのか、われわれにはおそらく決めることはできない、不本意ながらバッシュに対応していかなければならないところだとは思いますが、もし対面講義が可能になったときに、オンラインの講義で得られたいくつもの利点をどう活かしていったらいいのか、あるいは逆にオンラインで自分やらなければい

けない状況の場合に、対面の良さを求める学生あるいは教員の側の意向はどうかされていくべきかという漠然とした質問ではありますが、そのようなことを意見交換してもよいかと思っています。

それに続いて、アンケートの設問2において理解度が上がったとありますが、確かに上がっているのですが、これは前提となるべき教員の側の教材、あるいは授業方法が対面でもオンラインでも変わらないという前提があるべきかと思います。でないとならば学生の意見だけでは、果たして鶴呑みにして良い結果なのかかわからないと思いました。私自身の経験で去年の1年間は非常に混乱して授業を勤務先でやっておりましたが、オンラインの工夫をするうえで、どうしても対面の授業そのままの情報量をオンデマンドで動画に上げるということはできないと判断して、かなり授業内容を簡便にしました。やさしくする、レベルを下げるということとあまり聞こえはよくないですが、先生方によってはこういった機会に授業のあり方を見直されて、よりわかりやすい方法をあみだした方は大勢いらっしゃると思います。そのなかで情報量を減らすという選択肢もあったと思います。ですので、授業の理解が上がったとか、満足度が向上したという意見が、教員の側が情報を減らした結果ではないのかということ、自分の反省もこめて皆さんにお伺いしたいと思っています。

最後ですが、39頁の今後の在り方について、広く歴史関係で法制史、経済史のジャンルの参加を期待するという文言がありました。これは所属でいえば、法学部や経済学部の教員の方々に参加を促すということになると思いますが、具体的にそれが可能かどうかということ。これは私の勤務先でも頭を抱えている問題です。そもそも教養教育の成り立ちからして、文学部系の部局が中心になってそれを担ってきたという経緯がどこもあると思います。甲南でもそうです。それ以外の社会科学系の学部・研究科の方々は、おそらくご所属の学部・研究科での授業負担が大きいということで、なかなか教養教育には乗り気でないということが、神戸大学でもあるのか勝手に想像しているのですが、果たして今後、法・経済の先生方の参加がどのくらい可能性として見込まれるのかということ、最後にお尋ねしたいと思いました。質問ばかりで申し訳ありませんが、コメントを終わらせていただきます。

貞好幹事：中町先生、多岐にわたる非常に貴重な、中には耳の痛い鋭い質問をたくさんいただきましてありがとうございます。本来ならば今すぐ応答できればよいのですが、竹内先生の質問時間も確保したいので、のちほど第3部の総合討論のところで私どもの部会構成員、特に最後の質問6などは大月院長にも助けていただいて答えられる範囲でお答えしたいと思います。

では先にお二人目の外部評価委員である竹内先生のご紹介をいたします。竹内先生は神戸大学の大学院で、修士課程も博士課程も、（今はもうなくなりましたが）現在の大学院の前身にあたる総合人間科学研究科で、修士および博士の学位を1999年、2003年にそれぞれ取得されています。その後、同志社大学の、現在はグローバル地域文化学部・グローバル地域文化学科・アジア太平洋コースの准教授として活躍しておられます。ご専門は中華人民共和国建国前後、中国共産党を中心とする、民族統一戦線に参加し、新国家の建設に貢献した民主諸党派についての研究をメインにされていると伺っております。その他、中国・台湾におけるジェンダーの

問題にも取り組んでおられると聞き及んでおります。では竹内先生の方から同じく20分弱忌憚ないご意見を伺えればと思います。よろしく願いいたします。

竹内外部評価委員：よろしく申し上げます。詳細なご紹介に預かりまして誠にありがとうございます。また本日はまたこのような委員会に参加させていただき、私にとって大変参考になることが多かったです。ありがとうございます。質問というより報告書を拝見し、また今日ご報告を伺ったうえでの感想、コメントをさせていただきます。

私どものグローバル地域文化学部は、前身は言語教育研究文化センターというところで同志社大学全学の語学教育を担っている部署でしたが、2つの校地に2つの学部に分かれておりまして、現在も英語と本学では初修外国語と呼んでいますが、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、コリア語と6つの言語の教員が所属し、学部の専門教育とともに全学の語学教育を担っております。そのほかの教養教育科目につきましては各学部から科目と人員を出し合い、残りは嘱託、非常勤講師の先生方にも随分担っていただいております。

私も本日のご報告は非常に参考になる部分が多かったです。まず、神戸大学の全学共通教育の教育目標が、学生さんが大学卒業後に活躍される企業や団体などの社会において求められるような能力を養成するのに非常にふさわしい理念であると感じました。また国際教養教育院における全学共通授業科目全体についても、学生が所属する学部において専門的な知識を習得する上で基盤となるような、幅広い視点に基づく講義科目群を備えておられると感じました。特に、ESDと神戸学が、神戸大学の特色であると感じました。本日お招きいただきました歴史と文化の教育科目の科目群については、学生さんにとって魅力のあるバラエティに富んだ科目が備えられていると思います。私も実感として感じているのは、今の学生さんが興味をもつのは現代社会についてだと思しますので、現代社会におけるさまざまな現象というものを理解するには、各地域の政治や社会・文化の歴史的経緯についてきちんとした知識の習得が欠かせないと思います。特に学生さんが大学を卒業したのち職業に就いて国内外とさまざまな交流をもつなかで、相互の多様な価値観を尊重してそれぞれがそれぞれの文化に対する深い理解力を持ち、困難に遭遇してもそれらを創造的に解決でき、今後の多文化共生社会を実現するためのリーダーシップを発揮する上で、これらの歴史と文化教育科目群の学習が、学生にとって非常に重要な将来の素地を作り上げる、そういう意義をもつと評価いたしました。

日本史・西洋史・東洋史については、私自身も学部の教職課程の科目で、中国史を古代から現代まで1 Semesterで教えなければなりません。よく学生から言われるのは、受験時に世界史を勉強していた学生は深く勉強しているので何もかも知っているからつまらなく思うんじゃないかという感想を持つ。一方で、日本史など世界史以外の科目を選択していた学生は、あまり知識がないからついていけないかどうか心配だと言ってきます。双方の学生が共に興味をもって学習を進めていくための工夫が必要だと感じているのですが、この科目群とシラバスを拝見したところ、それらの受験で選択していた学生、選択していなかった学生双方の学生が、ともに興味をもって知識を深めて自らの考えを構築できるような、それを促すような工夫が豊富に施されていると感じました。

アンケートを拝見しましたが、令和2年度からコロナ禍によって各大学ではオンライン授業の導入を余儀なくされた際、それに対する社会的批判も多々あるとは思いますが、アンケート結果にも表れているように、オンライン授業によってむしろ学生さんの学習時間は増加した部分がありますし、また学業への取り組み方や姿勢も積極性を増している部分もあると思います。無論、対面授業には対面授業なりの良さがあり、特に語学科目などの履修科目やゼミ演習などの少人数科目には、対面授業が非常に効果的であるのは確かですが、大教室における大人数を対象とした大規模な教養教育科目においては、オンライン授業が学生さんの意欲や理解力を高めて一定の効果を上げていると感じています。私自身は中国史の授業をオンデマンド授業でおこなっておりまして、パワーポイントのファイルに地図なども掲載し、事典項目も書いて、そこにナレーションを入れたものを一定期間見られるようにYouTubeに搭載し、学生には、毎回90分の講義時間のなかで話した特定の問題についての要約の課題を一週間後までに提出させるということを行っております。感想も書かせますから、課題を毎回見て採点するのはかなり大変ですが、利点としては学生がいつでも自分の希望する時間に講義を見られることと、要約を書くのは対面授業の場合も行っていたのですが、対面授業の場合は授業を聞いていても聞いていなくても授業の最後に今日お話ししたこれこれについてまとめてくださいと、その場で、インターネットで調べたり電子辞書を調べたりして書いてもらうことが多かったのですが、オンデマンドですと何回も見直すことができますので、学生が最後にテーマに即してもう一度見直して、理解度を上げるという効果があったと感じております。それからアンケートのなかであったのは、オンデマンド授業の場合はパソコンに向かっていきますから、授業のなかで自ら興味を持った事項について、授業を聞いたあとに自分でさらに調査すると述べる学生が多く、学習を深める効果があったのではないかと感じております。今後はコロナの状況が落ち着いてきているとはいえ、一部の授業ではオンライン授業を継続させる必要がありますから、今後の課題として私自身も感じていることは、ビデオなどの視覚教材を取り込むと、対面授業の場合は寝ていた学生も、突然起き出してビデオを見るという現象があって非常に効果的でしたし、耳で聞くだけでなく目で見て視覚的に理解を深めるという効果もあったと思います。反面、オンライン授業では画面が次々に変わってしまうことで、逆に学生の集中力を分散させてしまうというマイナス面もあるのではないかと感じております。

もう1つの課題は、対面授業の場合ですと、グループ分けしてディスカッションをする、こちらのアンケートのなかにもそれが非常によかったとありますが、今ですとzoomのブレイクアウトルームを使って議論をしてもらうということになりましようか、その場合は、質問できる教員がそばにいないですから、主旨や議論すべき内容を教員の方で事前に十分に飲み込ませるという必要があるのではないかと思います。ですので、今後のオンライン授業についても、対策やより一層の工夫が必要であろうと感じています。

先ほど中町先生もおっしゃっておられましたが、科目名を拝見すると、人文科学と自然科学は非常に充実しているのですが、政治・法律・経済などの社会科学の分野が欠けていますので、そこを充実させる余地があるのかなと思いました。

あとは小さい質問ですが、西洋史、科目の概要を拝見したときに、アメリカ大陸はどこで扱うのかなと感じました。シラバスを拝見したところでは、西洋史のなかに含まれているようなのですが、この概要の説明ではヨーロッパを中心にと書いてあるので、東洋史、アジア史でもないですし、アジア・太平洋ということでアメリカ大陸もそこに入るのかなと思ったりします。アメリカ大陸、それも北米だけではなく中南米に対して興味がある学生は非常に多いと思います。そこがどの科目に含まれるのかということをもう少し明示されてもよいのではないかと感じました。

それからLMSやBEEFと伺ったのですが、これはどのようなものであるか参考までにお伺いできれば大変ありがたいです。私からは以上です。

貞好幹事：竹内先生、多岐にわたるご質問やコメントを、同志社大学の状況もふまえながら投げかけてくださいます、どうもありがとうございます。それでは私の時計で現在2時15分ですが、5分休みを取りたいと思います。2時20分から再開したいと思いますので、それまでしばらくお過ごしください。

●第3部 全体討論

貞好幹事：それでは第3部を再開したいと思います。全体討論に入るまえに簡単に自己紹介をお願いします。外部評価委員の先生方、大月院長と緒形部会長、私をのぞく方々に、お名前と簡単な専門領域の説明をお願いします。

平芳幹事：幹事を担当しております平芳裕子です。専門は表象文化論・ファッション文化論で、この部会では芸術史を担当しております。よろしく願いいたします。

小澤先生：国際文化学研究科の小澤卓也と申します。専門はラテンアメリカもしくは食のグローバルスタディですが、この歴史と文化では南北アメリカを担当しております。前期はアメリカでやっております。アメリカのアフリカ系の公民権運動の話、後期はラテン・アメリカということで、中南米、南北アメリカを担当しています。どうぞよろしく願いいたします。

長先生：国際文化学研究科の長志珠絵と申します。日本の近現代史、ジェンダー史、文化史、社会史などなど植民地支配までやっており、日本史A・Bで前期に固めているのですが、日本の19世紀と20世紀の国民国家形成の話をして、理系の学生に日本史も科学だったんだと分かってもらえる授業を目指しています。

高田先生：高田京比子と申します。ここ最近までは西洋の中世史をやっていましたが、あまり評判がよくなかったので、オンデマンドに変わりましたときは東地中海の異文化交流にテーマを絞ってやりました。緒形先生の前の前の部会長をやっておりました。

伊藤先生：人文学研究科の伊藤と申します。専門は中町さんと全くかぶりますが、13世紀から16世紀のエジプト・シリアの歴史を専門にしております。この部会では東洋史を担当しております。よろしく願いいたします。

貞好幹事：どうもありがとうございました。まずは外部評価委員のお二人からいろいろ質問を投げかけていただきましたので、それに私どもの側から答えたいと思います。中町先生のコメントは6つありましたが、1つは科目名、東洋史とアジア史は何が違うのか、美術史と芸術史の境目は何か、学生はわからないのではという、ごもっともな、これは来るだろうなと予想しておりました質問です。東洋史担当の伊藤さん、いかがでしょうか。

伊藤先生：ひとことで言えば組織上の違い。アジア史を担当されているのは、かつての国際文化学部、現在の国際文化研究科の先生方で、東洋史のほうは、人文学研究科の教員が担当するということになっています。その違いを出すために、シラバスには東洋史の方はユーラシアを強調し、アジア太平洋と先ほどお話しが出ましたが、アジア太平洋とは少し違うということにしています。美術史・芸術史も担当される教員の先生方の所属している組織が違うのではないのでしょうか。美術史の方は人文学研究科で、芸術史の方が人間発達環境学研究科の先生方がされるということだと思います。

貞好幹事：私から少し補足しますと、結果として所属によって分かれているのですが、所属によって分かれることがメインではなくて、ある時期から自分は東洋史として教育を受けたので東洋史という枠組みの方が話しやすい、という個々の教員のディシプリンを尊重した結果ではなかったかと思います。その反面、中町先生がご指摘されるように、学生や学生以外の外部の人から見た時に、非常にわかりにくい、体系性を欠いたことになってしまっていることは、全くご指摘のとおりだと思います。ある時期に部会として見直しをするときにはこの二つは当然引っかかってくるであろうと思います。美術史、芸術史関係だと平芳さん、いかがお考えでしょうか。

平芳幹事：今、組織上というお話がありましたが、少し経緯をご説明させていただきます。もともとは、美術史と芸術史は分かれておらず、芸術史のみでした。芸術史という科目を、人文学研究科の教員2名、人間発達環境学研究科の教員4名、あわせて6名で担当していました。おそらくセメスター制からクォーター制への移行の時期だったように思いますが、もともと2単位の授業を1単位ずつにするということで、科目名の見直しがあり、その時だったかどうかは確認が必要ですが、確か、人文学研究科の教員から芸術史ではなくて美術史という科目名で担当したいという申し出があったというように聞いております。かなり前ですので記憶が曖昧ですが、結局それに特段の異論がなく、今に至っていると理解しております。今ご指摘いただいたように、外部から見ると違いがわかりにくいというのはあるかと思います。

伊藤先生：そうですね。それでいうと、東洋史という科目は元々なかったんですね。「歴史と現代」という非常にわかりにくい科目を、人文学研究科の東洋史の教員が担当していたので、より実態にふさわしい「東洋史」にしましょう、ということになりました。東洋史とアジア史の2つに分かれるのは、どうかという議論はありましたが、これでいきましょうということに落ち着きました。

平芳幹事：美術史と芸術史に関しては、人文学研究科の先生方の担当している美術史は、日本美術史や西洋美術史ですが、人間発達環境学研究科が担当している芸術史は、音楽史とデザイ

ンの歴史、デザインについては建築や服飾デザインを論じています。建築と服飾は、美術とも関わりがありますから、美術に触れる際、横断的な形で取り入れるようにしています。ただ今ご指摘いただいたように、美術史と芸術史と、言葉だけが並んでいるとわかりにくい側面はあるかと思います。

貞好幹事：歴史的に見ますと、2005年にこの現「歴史と文化」教育部会が発足したときにはかなり体系だっていたのです。ただ、我々現場の教員から見ればそれは上から降ってきたもので、教員も入れ替わりますから、担当するときに自分はこのようにやりたいという下からの草の根の声を尊重してきた結果、体系性からはやや外れる、いろいろな増改築を繰り返して今に至っていると言って良いでしょう。だから、次に大きな節目がきたときには、もう一回きれいな建て直しというか、体系性からみても矛盾のないある種の工夫が求められるだろうと思います。この件に関して、他に何かご意見ございますか。

長先生：私はここに来た時からこういう科目になっていて、やはり細かすぎると思います。他の部会と比べて。やはり国立大学は学生ファーストにもう少しシフトすべきです。特に高等教養教育は、概要などで細かいことは書けばよいのです。外から見てもそうだろうし、私のように10年いる内部の人間でも、いまだによくわからないところがある。歴史や経緯はあっても、それはあまり関係がないので、今度の改正のときには、もう少し科目名を整理した方が良いでしょう。細かく分けると危険なのは、その科目を担当ができる人を、次にも必ず取らなくてはいけなくなることです。これも無理ですから、やっぱり教員に科目名がつくというのは、さまざまなレベルにおいて、とても危険なことだと思います。もうちょっと一般的、普遍的なものにしたほうが良いと思います。

貞好幹事：それを受けて言うと、もう一つの大きな対立軸があって、どちらかという本部主導の上から降ってくるものは、たとえば物理学であれば、誰がやっても、どの教員がやっても、同じ物理学基礎が身に付く、それと同じ発想で、アジア史であれば、教員がAさんであろうが、Bさんであろうが、Cさんであろうが、誰がやっても同じことが身につくような、ある種のスタンダードな授業をやってほしいと思っておられる人も上層部にはおられるようです。それに対して、我々教員は当然反発しますよね。

長先生：まあ、しかし、授業の概要まで全部一緒にはならないでしょう。

貞好幹事：理想としては、個々の教員全部に、それぞれ人とは違うことをやっていただきたいわけで、そういう大きな対立軸の一つの表れが、今のような結果だと思います。だから、その兼ね合いをどう取っていくのかというのは、ある意味で永遠の課題ですけれども、今のままでは少し具合が悪いというのは、ご指摘の通りだと思います。今後の課題ですね。報告書でも言及させていただきたいと思います。

では次に移ります。中町さんが2番目に出された、授業のテーマ欄の使い方が教員によってさまざまである。24ページの例はよいが、サブテーマに相当するものを書いている人もいれば、授業の概要を書いている人も混在している。ある種の統一的な工夫があるのではなかろうかという問題です。何かご意見ありますでしょうか。

緒形部会長：中町先生のご提案は、サブテーマと概要について、項目を2つ、新たに分けるようにしたらどうかということですか。

中町外部評価委員：はい、そうです。

緒形部会長：分けるとなると、全体のシラバスのデザインをやり直すことになります。私は、それは、今まで思いつかなかったのですが、いいアイデアだなというように、お話をお伺いして思いました。この部会だけでは解決ができませんね、大月委員長、いかがですか。

大月院長：授業科目と授業目標につきましては、かなり部会によって差が出ております。たとえば基礎教養の方になります、社会学などですと、科目名が同じであるということは、身に付けるべき目標という大きな意味では同じだと考えられて、目標の部分か、テーマかどちらかを同じ内容にしていますね。その考え方を歴史と文化部会に適用するなら、部会では学生にこういうことを身につけさせようとしているという共通フレーズを設けて、その下に、「それらの共通目標を～を通じて身に着ける」という書き方にある程度統一するのはどうでしょうか。他には、細かい概要については各先生方がそれぞれ自分のやりたいことを書くとしている部会もありますので、それらを部会の方で調整していただければと思います。大きな流れは、できる限り同じようにしようという方向ですが、しかし外国語におきましては（外国語の方が書きやすいのかもしれないですけれども）、科目名ごとに目標は同じにして、具体的な授業の内容や概要の部分については、個人個人で書くとしております。これらにつき、部会内で話し合っただけであればありがたいと思います。本来なら大学全体で同じ書き方をするのが理想ですから、少しその辺のことを念頭に置きながら検討の上、また、こちらまで相談いただければ、こちらの方からもどこをどう変えるべきかということはお答えできるかと思えます。ありがとうございます。

貞好幹事：ありがとうございます。では3番目の問題に移りたいと思います。受講者数ですね。これ曜日や時限の関係もあるかもしれませんが、偏りが相当多いものが見られるのご指摘です。甲南大の履修制限は150人ということでしたけれども、科目ごとの受講者の偏りをどのようにどうやって是正するかという見通しがあるのかなのか、というご質問だったと思います。これは如何でしょう、緒形さん。

大月院長：制度だけこちらで説明しましょうか。

貞好幹事：では院長をお願いします。

大月院長：現在のところ神戸大の制度としましては基礎教養科目、総合教養科目に関しましては、学生の希望者をつのって抽選登録をしております。各曜日ごとに、まず配当されている1年生につき、ある時間帯はどの学部の学生が優先して取れるというのが決まっております。その方々がまず最初に希望を出して1クラスmax200名と制限しておりますので、200を超える希望者がある場合は、第2希望、第3希望で空いている科目にまわってもらうという形でやっております。まだキャパシティに余裕がありましたら第2希望、第3抽選ということで、2年生や1年生で他のところに優先なだけけれども、もう少しこの時間枠の科目を取りたいという学生が取るという仕組みになっております。ただ、時間割でどの時間帯にどの授業を置く

かというのはなかなか難しいところがございます、ここは何人ぐらいの受講者が出るだろうということ、前年度実績を見ながらクラス分けしているのですが、先生方のご都合で、そこがずれてしまったときに非常に困ることが起きます。そういうことがおきたときは、部長を通じて、各学部の先生に向けて、この時間は空いていて、この時間は多いですから、どなたか代わってくれる方はいらっしゃいませんかということを問い合わせますが、なかなかうまくいっていない。それで多少偏りが出ているというのが事実でございます。仕組みについては今のような形でやっております。

貞好幹事：ありがとうございます。4番目の問題にいきたいと思います。これは学生の授業アンケート、コロナ前とコロナ後を比較したものを、中町先生がたいへん詳細に見てくださって、デジタル・リテラシーが教員学生ともに向上したと、結果マッチングが向上したという意味では、驚きとともに納得する結果でもあった。ただし、37ページの一人の学生の声として対面やリアルタイムの方が自分はよかった、オンデマンドはちょっと残念であったというような声もある。このコロナ後のオンラインの問題というのは、今日の全体討論に出られたみなさん、それぞれに一言言及の大事なテーマだと思いますから、これはあとの議論に委ねることにして、私から一言申し伝えますと、対面やリアルタイムの方が好評なのに、オンデマンドをやらざるをない訳は、教室のキャパシティの問題があるんですね。対面はもちろん物理的な空間を必要としますし、リアルタイムでやるとしても、現状はリアルと対面が混在していますので、大学内にアクセスポイントという、学生が授業を受ける場所を確保しなければいけない。ところが、それがなかなか大変で、対面授業をやる教室、アクセスポイントを設ける教室が足りなくなってしまう。だからオンデマンドでやらざるをないという事情が生まれることを申し添えておきます。この点は大事ですので、みなさんのご意見を後で伺う時間にゆだねたいと思います。

5番目は、アンケートの設問2の理解度についてです。これは統計学的に見て、こういうアンケート形式の根本的問題として簡単に鵜呑みにはできないという非常に鋭い指摘でしたね。問い側の方法が2年前も今も変わらないのなら、理解度が上がったと言えるのだけれども、変わっているのに、母数に変数があるのにその結果をもってより良くなったと評価するのはちょっと問題があるんじゃないか、というご指摘は科学的には全くその通りだと思いますね。しかしながら、教員側は、学生側もそうでしょうけれども、2020年、必死に努力したわけです。その結果として理解度が上がったというのは、これについても後の議論に委ねましょうか。私がいろいろ答えるよりも、ここは司会に徹して、理解度云々は、取りようによっては判断が難しいところですから、あとの議論に委ねたいと思います。いずれにしても非常に鋭い指摘だったと思います。

6番目、これは大きな問題ですね。法制史や経済史に代表されるようないわゆる社会科学系について、科目名から見ても、教員の所属から見ても、参加がまだ少ないということを見破られてしまいました。この参画の可能性が今後可能であろうかというご質問であったと思います。これについては、国際教養教育院長の大月先生にこれまでの経緯を簡単に紹介していただ

く必要がありますね。

大月院長：中町先生がご推測されたとおりでございますけれども、神戸大学としましてはもともとやはり人文系の学部が共通教育の文系科目のほとんど担っていたという事情がございます。そこに、いままで共通教育をやっていなかった学部の先生にも参加していただくということで進めております。9、10頁の「組織体制」のところを見ていただきますと、たとえば理学や農学という教育部会があるんですが、これはその学部が中心となってその学部の専門性をいかしながら何か教養教育ができないか、科目を立ててくださいというお願いをして、たとえば保健学は健康について、農学ですと食についてという形の授業科目を今たてているところです。社会系に関しましても、「組織体制」の7番と8番に「法と政治」、「経済と社会」という部会を立てております。ここには人文系の学部の出身の先生方もいらっしゃるんですが、それに加えて社会科学系の学部で、いままで担当していなかった先生も出てもらおうという形で作ったのです。全体に混ぜるというよりは、別のこういう形の部会で、何か授業をやっていく形で少しずつ授業を増やしてきたという事情がございます、それまであった科目（「歴史と文化」もそうです）については、それまでの人文科学系の学部が担当しているという形になっております。ぜひこの辺も、何かの機会にやはり混ぜて社会科学系も入れるべきだという意見を、部会の方からも次の改革の時に提案していただければ、うまくいけば、そういうところから改革が進むのかなと思います。そういう指摘があったと、特に、外部評価の先生からあったということを書いて残しておいていただければ、非常にありがたいと思います。

貞好幹事：そうですね。本当にこういうことを言っていただけなのは、私どもとしても本当にありがたいことで、ここだけフォントを20ぐらいにして印刷させていただきたいと個人的には思います。

次に、竹内先生のコメントがいくつかありましたが、1つ目は、神大の全学教育の教育目標が社会の要請にマッチしているし幅広くバラエティに富んでいて魅力がある、多文化共生社会のリーダーシップ養成という意義も大きいと、過分のお褒めの言葉をいただきました。だが同時に、同志社大学でも同じことが発生しているのですが、学生の中の多様性といえましょうか、受験のときに選択した科目によって、学生の間にある種の学習上のギャップが存在するという、これも非常に的を得た、我々「歴史と文化」教育部会も直面している問題ですよ。これはちょっとフロアの方に、たとえば長さんとか、比較的高等教育では手薄の地域やイスラム世界をやっておられる伊藤先生にも、ご意見があれば伺いたいと思います。

長先生：私は、学生には中学校までの勉強で十分ですと言っています。今後、高校は「歴史総合」が2022年の春から新設されますけど、もともと歴史総合的なところを目指していたので、今後、歴史総合の人が3、4年後に入ってくるんですかね、そうになると少しバッティングするかもしれませんが、現状は、大学受験で日本史をとっている人はイメージが変わったと書く人が多いですし、そうでない人も、大学の歴史学は違うという授業の感想を持つ人がほとんどで、そこは意識しながら授業を組み立っています。

貞好幹事：ありがとうございます。突然指名してすみませんでした。伊藤先生、いわゆる受験

世界史との接続・不接続の問題に対する、ご自身なりの悩みなり工夫があれば。

伊藤先生：そうですね。受験の世界史を取っている、取っていないに関わらず、全体になじみの薄い地域のことをやっているの、基本的なことから説明するようにはしています。

緒形部会長：この問題はオンデマンドというか、遠隔が入ってくることによって解決できることがあって、それは用語とか年代というのをネット上の辞書に飛ぶようにする。もちろん知っている学生はいいんだけど、知らない学生もすぐ飛べるような操作は今まで以上に容易になっていますね。なので、高等学校の世界史Bで学習するような歴史用語でも、世界史Aしかやっていない人に対して、ネット上のここを見なさいというように指示しておく。データとかビジュアル面でも工夫ができるような気がします。そういう意味では高校の履修・未履修ということからくる学習上のハンディは、今まで以上に解決が容易になっているのではないのでしょうか。

貞好幹事：はい、みなさん、ありがとうございます。時間がおしていますので、少し先を急ぎたいと思います。

2番目の学生アンケートの対する竹内先生の評価は、全体に改善していて、オンライン授業にたいする社会的批判もあるものの、実際は改善している。ただし対面授業の良さもあることを忘れてはならず、今後は対面とオンライン、さらにはオンラインのなかでもリアルとオンデマンド等の工夫は必要だし、その工夫の余地も多様化しているというご趣旨だったと思います。ご自身の授業の工夫の一旦もご披露くださいましたけれども、私どもの提言として受け止めたのは、一つはビデオなどのビジュアルな視覚教材を活用するのが効果的ではないかということと、それからグループ・ディスカッションを対面でやっていたとき、zoomではブレイクアウトルームとなりますが、これも事前によく課題の趣旨を飲み込ませないといけないということでした。ある種のご示唆、ご提言と受け止めさせていただきました。ありがとうございます。

それから3番目、人文系自然系に比べ、社会科学系が弱いというのは、先ほどの中町先生の最後のご質問と重なり、大月院長から回答して頂きましたので、これは割愛させていただきます。

4番目のアメリカはどこにいったんだということですが、さっき小澤さんの自己紹介にもありましたように、アメリカは一応西洋史の枠組みに入っているんです。その辺、小澤さんどうですか。比重ということだと、東洋史とかアジア史はすごくあるのに、学生がアメリカをやっぱり知りたいということがあるのではと言うお話ですが。

小澤先生：私の場合は、アメリカ合衆国とラテンアメリカの授業を、毎年いろいろと入れ替えています。前の年にとった学生のノートをそのままもらって書かれることのないように、だいたい2年飛ばしとか、3年飛ばしでやってるんですけど、履修者は間違いなくアメリカ合衆国の方が多いです。ラテンアメリカの方が少ないことは間違いありません。アメリカの人気は、竹内先生がおっしゃった通りであるかと思います。ただ概要のところにはヨーロッパが強調されているとするならば、アメリカという文言を入れても良いのではないのでしょうか。もっと欧米という

形で。

貞好幹事：独立してね。

緒形部会長：16ページの「西洋史」の概要に欧米と入れて直していただく。ただアメリカは古代史がないですから、ちょっと工夫して文言をいれて頂ければ良い。実際に小澤先生が授業をされているわけですから。

貞好幹事：それならば大きな改革を待たずとも、西洋史のところに、ヨーロッパを中心にとあるのが問題なわけなので、アメリカもあるんだということを文章として書けばいいわけですね。

小澤先生：そこを竹内先生がずばり指摘してくださった。

貞好幹事：われわれの意識が共有されましたから、これは近々、直しましょう。せっかくのご提言だから。それからアメリカの次は最後の質問、LMS、BEEFについて簡単に説明してほしいということでしたが。

緒形部会長：これは実際に見せてご説明された方が。コンピュータを持っている方がBEEFを開けていただいて。多分、同志社大学でも、名前は違っても、同じようなものが設定されていると思うんですけども。

大月院長：LMSというラーニングマネジメントシステムです。

貞好幹事：神戸大学のラーニングマネジメントシステムがBEEFという愛称なんです。神戸だからBEEFなんです（笑）。

長先生：教員には自分の科目を設定してもらって、それをあけていくと学生と共有できる。学生が登録すると見れるようになっています。

貞好幹事：学生と教員しか見れない。

竹内外部評価委員：科目ごとに。

貞好幹事：科目ごとです。

小澤先生：教員からはアナウンスメントと課題などを出すことができます。それがアップされたらメールで届くようになっています。

貞好幹事：すべての連絡もやりとりできるし、期末の課題レポートの提出と採点もできる。

長先生：コメントをここに出させて短文で返すこともできます。

貞好幹事：2020年の忘れもしない春でしたが、BEEFとはなんぞやというところから始めて、素人でもわかるマニュアルを、情報系の先生が作ってくれて、2020年の4月と5月は、みんな必死で勉強して、いまや皆使えるようになってますね。これはコロナの功罪のうち、数少ない怪我の功名ですね。ITリテラシーが神戸大学も大幅にアップしました。

小澤先生：あと課題が複数あったときに、その課題の集計結果が登録履修学生ごとに全部出るんですよ。だからあとで全部見て計算することもできて、非常に有難いですね。

長先生：成績とか、課題とか、オンデマンド系のコミュニケーションとか、非常に楽でありがたいですね。

竹内外部評価委員：同志社には2つありまして、情報系で作ったものと教務系で作ったものが2つに分かれていて、こんなオンラインの授業形態になるということを想定していなかった

らしく、容量が全然足りません。一つに統一されているというのは素晴らしいです。

伊藤先生：容量が足りない問題はBEEFでもあります。特に2020年のときには、できるだけBEEFに課題を上げるなどか、一度に集中するとパンクすると、かなり言われました。

小澤先生：特に動画は。全部5分以内でしたよね。

長先生：動画は外部ですね。

伊藤先生：動画は別のところにあげなさいということで。

長先生：ただそういうのも教えていただいたので、そんなことが自分にできるとは思いませんでしたが、できるようになりました。

貞好幹事：はい、ありがとうございます。司会の不手際で当初予定していた3時になってしまいました。お二人の外部評価委員からのご質問はひとつとお答えしたのですが、なかにはなおペンディングのものも残っているし、これも一般フロアの方々から特にアフターコロナのことであれ、展望であれ、それ以外のことでも結構ですけれども、これだけは言っておきたい、答えがなくてもいいですが、言っておきたいことがあれば、どなたでも。

高田先生：コロナのあとで理解度が上がったとか、それはいいと思うんですが、学習時間が増えたという結果については、コロナのオンデマンド授業でしたら、レジュメが配布されてそれをたとえば90分の授業時間に読んでそれ以外にどれだけ学習したか、オンデマンドの配信をもらってそれを何分か見て、それ以外にどれくらい学習したかという形で答えている学生は少ないのではないかと思うんですけれども。

貞好先生：そこをごっちゃにしている可能性はありますよね。否定できません。私もアンケートを分析しながら思いました。だから一見バラ色の分析結果も、中町先生が指摘くださったように、そうそう簡単に鵜呑みにしてはいけない。かなり批判的な目で見なければならぬというのは確認しておいた方がいいと思います。ありがとうございます。他にございませんか。外部評価委員のお二人、言い残したことはございませんでしょうか。

中町外部評価委員：一点、アンケートから伺えるところで、やっぱりディスカッションの時間に苦労されているのかなと思ったのですが、すごくディスカッションがうまくいったというコメントをしている学生さんが一人いらっしゃって、それはどうやっているのかな、と。もちろんコロナ禍での授業で、リアルタイムのオンラインなんですかね。そういうところでディスカッションができたということの評価している学生さんがいらっしゃったんですが。

小澤先生：チャット機能。自由に会話するというそういう機能を使っているのかもしれないね。

伊藤先生：たとえば36頁の芸術史ですね。「他の受講生とのディスカッションを通して、他の人がどんなことを考えているのかを知り」と書かれています。

中町外部評価委員：よっぽど資料が事前にうまくできていたということですね。ブレイクアウトルームもうまく使われていたからこういうふうになったということですね。

貞好幹事：ブレイクアウトルームかもしれませんし、チャットも併用したかもしれませんが、これは竹内先生が先ほどおっしゃったように、おそらく担当の教員がうまく説明し、うまくリ

ードしたのではないかと思いますね。学生諸君の自発性、たまたまそのクラスにリーダーシップが取れる子がいたとも考えられます。ただ、その辺はこのアンケートからだけでは、本当のところはどうだったかは読み取れない。

中町外部評価委員：ブレイクアウトルームは、学生によっては、もっと良い雰囲気で行ってほしいとか、否定的な意見もありますし、本当に難しいなと感じました。

貞好幹事：難しいですね。他にございませんでしょうか。まだまだ話は尽きないし、問題は多々残されているわけですが、2時間ほどの間に、沢山の問題点を「見える形」で言葉にさせていただいたというだけでも、今後私どもの部会にとって、あるいは神戸大学全体の教育のあり方について、さまざまな改善すべき多くのサジェスチョンをいただいたのではないかと思います。3月の下旬に最終報告書を作るわけですが、その際にはぜひ中町先生、竹内先生からいただいたご提言、疑問、ご叱責、サジェスチョンをはじめ、フロアから出た意見を一番適切な形に盛り込んで、私たちの部会、神戸大学の教育のあり方の改善につなげていけたらと思います。それでは最後に、もう一人の幹事でいらっしゃる平芳先生の方から、閉会の辞をまとめていただきたいと思います。

●閉会の辞

平芳幹事：本日は年始早々お忙しいところをお集まりいただき誠にありがとうございました。おかげさまで歴史と文化外部評価委員会を無事執り行うことができました。中町先生、竹内先生からいただきました貴重なご指摘・ご意見を踏まえまして今後の「歴史と文化」教育部会の授業改善に努めてまいりたいと思います。それではこれにて閉会とさせていただきます。本日はまことにありがとうございました。

貞好幹事：ありがとうございました。

閉会 午後3時過ぎ

第 2 章 外部評価委員による「外部評価委員報告書」

外 部 評 価 委 員 報 告 書

令和 4 年 1 月 8 日

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構国際教養教育院
「歴史と文化」教育部会 御中

甲南大学文学部
教授 中町信孝

外部評価委員として国立大学法人神戸大学大学教育推進機構国際教養教育院「歴史と文化」教育部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意 見

○ 特に優れている点

コロナ対応の授業においても各教員の工夫が見受けられ、その結果が学生アンケートにも顕著に表れていました。

○ 特に改善を要する点

科目名について、「アジア史」と「東洋史」、「美術史」と「芸術史」のように、違いが分かりにくいものがあるように見受けられます。

またシラバスの「授業のテーマ」欄は、担当者によって短いフレーズを記入する場合と、文章で授業概要を示す場合とが混在しており、書式の統一が望まれます。

時限による履修者の偏りについては、授業時間の調整などが必要でしょう。

○ 全体的講評

さまざまな点で受講学生に対する細やかな心配りがうかがえ、全学対象の教養教育として理想的な環境が実現していると思われました。そうした取り組みは、学生アンケートに見る理解度や満足度評価の向上からも明らかです。

ただし、コロナ禍の中におけるオンライン主体の授業では、必ずしも平時の授業と質量においてまったく変わらない内容とは限りません。教員によっては情報量を減らして教材作りを行うこともあり、その場合には学生からの肯定的評価も差し引いて考える必要があるでしょう。授業形態については今後もさまざまな配慮が必要となるでしょうが、オンラインと対面の利点・欠点を見極めていきたいものです。

法学・経済学分野への授業展開は、社会科学系各学部の教員に対して教養教育の必要性を啓蒙する必要がある旨も付言しておきます。

以上

外部評価委員報告書

令和4年1月12日

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構国際教養教育院
「歴史と文化」教育部会 御中

同志社大学グローバル地域文化学部
准教授 竹内 理樺

外部評価委員として国立大学法人神戸大学大学教育推進機構国際教養教育院「歴史と文化」教育部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意見

○ 特に優れている点

日本史・西洋史・東洋史などの科目については、学生は受験時に選択した科目についてはかなり深く学習していることがあり、一方、受験で選択していない科目に関してはあまり知識がなく学習面に不安を感じることもあるが、それら双方の学生がともに興味を持ち、知識と理解をより深められるような授業内容を準備し、学生がみずからの考えを構築するための工夫が十分にほどこされていると感じた。

令和2年度からはコロナ禍のため、各大学ではオンライン授業の導入を余儀なくされた。それに対する社会的な批判も多々あるが、令和3年度のアンケート結果に表れているように、オンライン授業によって学生の学習時間はむしろ増加し、学業への取り組み方・姿勢にも積極性が増している面があり、オンライン授業にはもちろん難点もあったと考えられるが、各科目担当者の工夫により、学生の学習意欲や理解力を高め、一定の効果を上げていることが評価できる。

○ 特に改善を要する点

科目名一覧を見たところ、人文科学と自然科学に関する科目は充実しているが、政治・法律・

経済など社会科学の分野に関する科目が欠けており、今後さらに充実させる必要があると感じた。

学生の多くが興味を持つと考えられる北米や中南米地域について、各科目のシラバスを詳しく見ると西洋史の授業の中で扱われていることがわかるが、講義概要や科目名をみただけではどの科目の中で扱われているのかが明確に表されていない。講義概要をみただけで、西洋史を履修すればアメリカ大陸の歴史を学ぶことができるとわかるよう明示する必要があると考える。

大教室における大人数を対象とした大規模な教養教育科目においては、今後も一部の授業でオンライン授業を継続させる必要があると考えられるが、対面授業ではビデオなどの視覚教材を盛り込むことが講義内容を視覚的に理解させ、講義を補完する効果を生んでいたのに対し、オンライン授業では学生の集中力を低下させてしまう恐れがある。また、授業内で学生をグループ分けしてディスカッションをさせる際は、対面授業の時以上に、その趣旨や議論すべき内容を十分に説明した上でブレイクアウトルームを利用する必要があり、これらの対策についてより一層の工夫が必要であると感じた。

○ 全体的講評

学生は現代社会のさまざまな現象にもっとも関心をもつ傾向があると考えられるが、現代社会を理解するためには、各地域における政治・社会・文化の歴史的経緯を理解することが不可欠であり、多文化理解の学習を目的とする「歴史と文化」教育文化科目群には、学生にとって非常に魅力あるバラエティに富んだ科目が備えられていると評価できる。

また、「歴史と文化」教育文化科目群の学習は、学生が大学卒業後、職業に就いた後、国内外との交流の中で相互がもつ多様な価値観を尊重し、それぞれの文化に対する深い理解力を持ち、困難を創造的に解決できる能力を備え、多文化共生社会を実現するためにリーダーシップを発揮していく上で、重要な素地をつくりあげる意義をもつと考えられる。

以上

第 3 章 外部評価結果を受けての、本部会の今後の課題

外部評価は、「歴史と文化」教育部会の取組に対して、次のような高い評価を与えた。

・オンライン授業によって学生の学習時間はむしろ増加し、学業への取り組み方・姿勢にも積極性が増したという授業アンケートの結果分析にも明らかなように、コロナ対応の授業においても各教員のさまざまな工夫を通じて、学生の学習意欲や理解力を高め、一定の効果を上げていると評価できる。総じて、さまざまな点で受講学生に対する細やかな心配りがうかがえ、全学対象の教養教育として理想的な環境が実現している。

・本部会の科目群は、学生が大学卒業後、職業に就いた後、国内外との交流の中で相互がもつ多様な価値観を尊重し、それぞれの文化に対する深い理解力を持ち、さまざまな困難を創造的に解決できる能力を備え、多文化共生社会を実現するためにリーダーシップを発揮していく上で、重要な素地をつくりあげる意義をもつと評価できるだろう。

同時に、今後改善すべき課題として、次の諸点が挙げられた。

・科目名について、「アジア史」と「東洋史」、「美術史」と「芸術史」のように、違いが分かりにくいものがあるように見受けられる。

・法学・経済学分野への授業展開は、社会科学系各学部の教員に対して教養教育の必要性を啓蒙する必要がある。

・シラバスの「授業のテーマ」欄は、担当者によって短いフレーズを記入する場合と、文章で授業概要を示す場合とが混在しており、書式の統一が望まれる。また、学生の多くが興味を持つと考えられる北米や中南米地域の歴史に関する情報が、西洋史のシラバスに注記されるだけで、講義概要や科目名の中で明示的に示されない点も、今後、改善が必要である。

・授業時間帯によって履修者数にかなり偏りがある点については、授業選択枠の調整など、さまざまな工夫をする必要がある。

・大教室における大規模な教養教育科目においては、今後も一部の授業でオンライン授業を継続させる必要があると考えられるが、対面授業では効果を上げるビデオなどの視覚教材が、オンラインではかえって学生の集中力を低下させてしまうことがある。また、グループ・ディスカッションを行なう際には、対面授業以上に、その趣旨や議論すべき内容を十分に学生側に理解させた上で、ブレイクアウトルームを利用するなど、より一層の工夫が必要となってくる。オンライ

ン授業の一部恒常化を想定しながら、これらの諸点につき、より一層の工夫が望まれる。

以上のような外部評価の提言を踏まえた「歴史と文化」教育部会の今後の課題は、以下のよう
にまとめることができるだろう。

- (1) 「アジア史」と「東洋史」、「芸術史」と「美術史」など科目名の違いが分かりにくいもの
の取扱いについて調整を行なう。
- (2) より学際的な領域へと本部会の科目群を拡大する際、法学や経済学などの社会科学系の教
員との連携を今後強めてゆく。加えて、「歴史学入門」を冠した導入授業の開講の可能性を探る。
- (3) シラバスの「授業のテーマ」欄に、講義のキーワードを書く方向と、講義の概要を書く方向
が混在する現状を改め、講義の実態がより分かりやすく伝わるような書式の変更と統一を目指
す。これは、「歴史と文化」教育部会に留まるものではなく、「総合教養科目」全体で議論すべ
き課題でもある。
- (4) 時間帯ごとの履修者数の偏りに関して、事前抽選制をより効果的に行なうなど、極端な人数
のばらつきを解消する努力を続ける。
- (5) アンケート結果で高い評価を得たオンライン授業であるが、これまでのアンケート質問事
項を、対面授業とオンライン授業の形態の相違に基づき、より合理的かつ実態を反映できるよう
な項目にまとめ直し、精度の高いアンケート調査を実現すると共に、授業での視覚教材の取り扱
い、グループ・ディスカッションに関する教学上の工夫など、オンライン授業の効果をこれまで
以上に高める方法を追求してゆく。

以上